

平城貝塚

平城貝塚第Ⅴ次発掘調査報告書Ⅱ

1997

愛媛県御荘町教育委員会

平城貝塚

平城貝塚第Ⅴ次発掘調査報告書Ⅱ

1997

愛媛県御荘町教育委員会

卷頭 図版



第5次調査出土土器

序 文

御莊湾にそそぐ僧都川の北岸に位置する平城貝塚は、縄文後期中葉の古の暮らしの証しを今に残す、四国西南部を代表する大切な文化遺産です。

1954年よりこれまで数回に亙る発掘調査が実施されましたが、一昨年を実施致しました第5次発掘調査は、文化庁の補助事業として関係各位のご支援をいただき終了することができました。これに伴い1996年3月に発行いたしました「平城貝塚第5次発掘調査報告書」に続き、前回報告書に掲載できなかった各分野に亙る分析調査の考察並びに土器の総括を、今回「平城貝塚第5次調査報告書Ⅱ」として発行することと致しました。

さて、本報告書では、これまで多くの研究者によって残された業績のうえに新しい角度での調査分析と考察が加えられております。今後も多くの先学の研究者の成果を層位的資料によって検証しながらそれを発展させて、事実を正しく後世の人々と研究者に引き継いでゆく義務を私たちは負っております。この報告書が平城貝塚で生活していた縄文時代の人達の生活と、現在を生きる私たちの関わりの解明の一助になることを願っているものであります。

最後に、「平城貝塚第5次調査報告書Ⅱ」発行にあたり、これまでご指導、ご協力を頂きました多くの機関をはじめ関係各位に深甚なる敬意と感謝を申し上げまして序といたします。

1997年3月

御莊町教育委員会教育長 西 平 六 郎

例 言

1. 本書は、縄文時代後期中葉における縄文人の文化と生業活動の研究を目的として発掘調査を実施した平城貝塚第V次発掘調査報告書（1996年発行）の続編とした報告書である。
2. 掲載した内容については、1996年の報告書の中に採録し得なかった自然科学の考察をもって「第1章」とした。其の1を貝層から検出した糞石について、其の2は、貝層ブロックサンプリングの調査結果を示した。「第2章」は出土土器についての総括と考察、最後に、「第3章」として第5次調査の結果の成果と将来への課題とした。
3. 本報告書の執筆については次の方々をお願いした。第1章其の1 松井 章（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）其の2 渡辺 誠（名古屋大学教授）第2章 犬飼徹夫（日本考古学協会会員）同氏総括補完として林潤也（別府大学学生）が担当、最後に第3章も犬飼徹夫が担当した。
4. 本書で採録した写真で執筆担当者から提供されたものは、（糞石）松井章、（ブロック、サンプリング）渡辺 誠、その他巻頭図版の写真撮影は幸崎が担当した。
5. 本書発行にあたり中岡修也、本田南城、辻内功、藤田儲三各氏の協力を得たことを記して感謝いたします。
6. 本報告書作成は御荘町教育委員会生涯学習課の職員が担当した。

本文目次

巻頭図版

序 文

例 言

第1章 自然科学的な調査	1
1 平城貝塚第5次調査出土の糞石	1
2 貝層ブロック、サンプリングの調査 —食用貝類・魚類の定量的検討—	3
第2章 出土土器についての総括	9
1 平城貝塚出土土器についての一試論	9
2 平城上層式土器（片粕式土器）の性格とその分布	12
第3章 第5次発掘調査の成果と将来への課題	27

挿図・写真・表目次

挿図1	平城上層式土器(1).....	17
挿図2	平城上層式土器(2).....	18
挿図3	平城上層式土器出土遺跡関連遺跡分布図.....	22
挿図4	平城上層式土器関連資料.....	22
挿図5	胴部文様変遷図.....	24
挿図6	第1次調査出土土器図(1).....	29
挿図7	第1次調査出土土器図(2).....	30
挿図8	第3次調査出土土器(1)復元図.....	31
挿図9	第3次調査出土土器(2)復元図.....	32
挿図10	第2次調査出土土器拓図(1~3).....	33
挿図11	平城上層式拓図.....	33
挿図12	第4次調査出土土器復元図.....	34
挿図13	三里式土器拓図・復元図.....	35
挿図14	宿毛式土器と平成I式土器との系譜要因図.....	35

巻頭写真 第5次調査出土土器

写真1	糞石.....	2
写真2	貝類・魚類骨.....	8

第1表	出土層位.....	1
第2表	出土層位.....	1
第3表	糞石実測表.....	2
第4表	ブロック・サンプリング一覧表.....	4
第5表	ブロック別内容一覧表.....	4
第6表	動物遺体種名一覧表.....	5
第7表	貝類構成比表.....	6
第8表	微小貝種名一覧表.....	6
第9表	微小貝構成比表.....	7
第10表	魚類構成比表.....	7

第1章 自然科学的な調査

1. 平城貝塚第5次調査出土の糞石

平城5次
B-4区
95/11/01
包含層(大)
II d層(混貝・骨層)
糞石5点
写真図版Nos. 1-5

第1表 出土層位

平城5次
B-4区
95/11/01
包含層(大)
IV層上面
写真図版No. 6 1点

第2表 出土層位

いずれも多孔質で比重は軽い。外面の色調は茶褐色で、貝塚土壌が付着するが、新しく割れた面では白いチョーク質である。6点の糞石とも色調は酷似する。ただしNO. 6では細かい骨が多量に含まれていることが肉眼で観察できる。これらの落とし主がヒトかイヌかは重要な問題であるが、ヒトとイヌとでは形態上区別が付かない。北米ではE. O. Callen, とT. W. M. Cameromが¹、三リン酸ナトリウム (Na_3PO_4) の0.5パーセント溶液に漬けると軟化することを発見し、さらにその溶液が茶褐色になることをヒトの糞石の指標となると発表した。(E. O. Callen, and T. W. M. Camerom 1955¹)。しかし、現在では、溶液の着色は、かならずしもヒトの証拠とはならないとされる²。また、イヌはヒトの残飯を食べる習性を持つため、内容物でも必ずしも差がでるとは限らないという意見が強い。

これまで縄文貝塚から出土した糞石の中にチョーク質のものを見る機会が多かったが、そのチョーク質は貝殻の石灰分が貝層の埋没中に固着した二次的变化の可能性があると考えていた。しかし、1995年の筆者のフィージ諸島における人類学調査に参加した折り、現地人の飼っているイヌが、縄文貝塚出土の糞石と同様、チョーク質で乾燥した糞をしていることに気がついた。このイヌは人間の残飯の魚類を日常的に大量に摂取しており、細かな魚骨の破片が糞の表面にも観

¹Callen, E. O. and T.W.Cameron 1955 'The diet and parasites of prehistoric Huaca Preeta Indians as determined by dried coprolites.' Proc. Trans. R. Soc. Can. 5, 51-52.

²Fray, Gray, F. 'Analysis of Fecal Material' The analysis of prehistoric diet Gilbert, R. Jr. and Mielke, J. H. eds. Academic Press pp. 127-154.

察できた。この経験からすると骨が多く含まれるチョーク質の糞石は、イヌのものの可能性が高くなった。

現在、筆者らが試みているのは、糞石をそのまま樹脂で含浸して切断し、光学顕微鏡を通して直接内容物を検眼する方法である³。これは破壊分析であるので、分析の前に、観察、計測などの記録を取り、さらにレプリカの作成を行う必要があり、まだ実施していないが分析手法を確立させて後、内容物を明らかにしたい。

第3表 糞石実測表

	注 記	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)
1	糞のはじめ、または末端部	26.5×21.0×21.2	5.1
2	直状で両端を欠く	31.5×23.7×20.0	6.5
3	端部破片	21.6×23.2×13.0	2.3
4	端部破片	17.8×14.2×11.0	1.4
5	破片	19.8×17.5×13.5	2.0
6	コロ状 ⁴ で約1/3を欠く	22.7×17.8×16.5	2.8

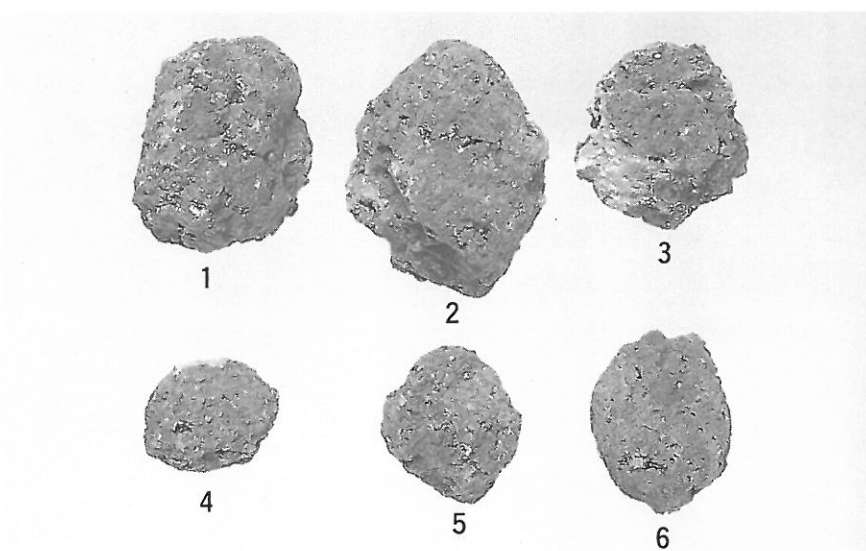


写真1 糞石

³松井 章・平山良治・宮路淳子・リチャード・マックフェイル1996「考古学における土壌微細形態学の有効性 (予報)」『1996年度日本考古学協会総会発表要旨』 p p. 149-152

⁴千浦 (1979) の分類、1. はじめ、2. 直状、3. しぼり、4. バナナ状、5. コロ状、6. チビ状にしたがう。千浦美智子1979「糞石」『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—』鳥浜貝塚研究グループ編 福井県教育委員会 p p. 170-175

2. 貝層ブロック、サンプリングの調査

— 食用貝類・魚類の定量的検討 —

1) ブロック・サンプリング (第4～6表参照)

ここに報告する2件の貝層のブロック・サンプリング資料は、1995年に御荘町教育委員会によって実施された第5次発掘調査によるものである。サンプリングの地区・層位、およびサイズは、第1表に示すとおりである。時期は縄文後期中葉である。

それらの調査目的は、第1は食用の貝類、魚類の定量的検討を行い生活復元の資料を整えること、第2は食用とはならない微小貝類の定量的検討によって貝塚の環境復元の資料を整えることである。

それらの水洗選別に当っては、0.6mm以上の各段階のメッシュを使用した。検出された資料の種類は第2表、動物遺体の種名は第3表に示すとおりである。主体は貝類と魚類であり、他はきわめて少ない。

2) 貝類 (第6・7表、写真2参照)

貝類は腹足綱(巻貝)、斧足綱(二枚貝)ともに7種で、計14種である。

それらの構成比は、第4表に示すとおりである。マガキとイボウミニナが大部分を占めており、両者のみでNO.1、NO.2ともに93%を占めている。これは従来の調査知見とよく一致している。

次に両者の比率を比較すると、ともにマガキがイボウミニナを上回っており、NO.1ではマガキ56%に対してイボウミニナは37%、NO.2ではマガキ67%に対してイボウミニナは26%である。

マガキは内湾の砂礫底、イボウミニナは内湾の砂泥底に棲み、砂礫を含んだ内湾の砂泥底が広がっていたことを示唆している。

3) 微小貝 (第8・9表、写真2参照)

海産微小貝2種、陸産微小貝7種、不明1種で、計10種である(第5表)。

それらの構成比は、第6表に示すとおりである。ウラジロベッコウマイマイ・オカチョウジカイ、およびキビガイが大部分を占めており、三者のみでNO.1では87%、NO.2では86%を占めている。次に三者の比率を比較すると両ブロックとも順位は同じで、ウラジロベッコウマイマイは49～55%で約半分を占め、オカチョウジカイは25～26%で約4分の1を占め、キビガイ属は7～11%である。

これらの生息環境は、いずれも灌木林の落葉下であることから、貝塚は海に向かった灌木林中に形成されたと推定される。

4) 魚類 (第6・10表、写真2参照)

魚類は6種が同定されたが、科レベルまでしか同定できなかったものもある。その数量は第7表に示すとおりである。

魚類の中でもっとも多いのはマイワシである。脊椎骨数で約75%を占めている。マイワシは外

洋の表層を遊泳するが、湾内に侵入した時に網漁などで捕獲されたのであろう。

スズキ・アジ科・タイ科・サバ科なども湾内で捕獲されたものと考えられる。

それらに対して外洋の魚類であるマルソウダがやや多いのは注目される。従来の調査ですでに知られているマグロ類・ハタ類・サメ類・ウミガメ類などとともに、外洋魚類が目だつのは本貝塚の特徴である。

5) 若干の検討

以上の検討結果から推定される漁撈活動は、御荘湾内における貝類採集や、網漁・ヤス漁などによる内湾性漁業を主体としていると考えられるが、外洋性魚類の目立つのも本貝塚の特徴といえる。しかしそれらを積極的に外洋で捕獲したとは言い難い。

また微小貝の検討結果からは、貝塚は灌木林中に形成されたと推定される。

第4表 ブロック・サンプリング一覧表
(サイズはタテ×ヨコ×厚さで示す)

番号	地区	層位	サイズ (cm)
1	C-5		19×15×9
2	C-5		24×17×10

第5表 ブロック別内容一覧表

種類	人工遺物	自然遺物				
	土器片	貝類	微小貝	フジツボ類	魚骨	獣骨
番号						
1	○	○	○	×	○	○
2	×	○	○	0.25g	○	○

第6表 動物遺体種名一覧表

I. 軟体動物門 MOLLUSCA

腹足綱 GASTROPODA

1. ニシキウズ科クマノコガイ *Tegula (Chlorostoma) xanthostigma* A. ADAMS
2. ニシキウズ科ダンベイキサゴ *Umbonium (Suchium) giganteum* LESSON
3. リュウテン科スガイ *Lunella coronata coreensis* RECLUZ
4. ムカデガイ科オオヘビガイ *Serpulorbis imbricatus* DUNKER
5. ウミニナ科フトヘナタリ *Cerithidia* (S. S)
6. ウミニナ科イボウミニナ *Batillaria zonalis* BRUGUIERE
7. アクキガイ科イボニシ *Purpura clavigera* KUSTER

斧足綱 PELECYPODA

1. フネガイ科カリガネエガイ *Barbatia (Savignyarca) obtusoides* NYST
2. イガイ科イガイ *Mytilus coruscus* GOULD
3. イタボガキ科マガキ *Crassostrea gigas* THUNBERG
4. マルスダレガイ科ハマグリ *Meretrix lusoria* RODING
5. マルスダレガイ科カガミガイ *Dosinia (Phacosoma) japonica* REEVE
6. マルスダレガイ科オキシジミ *Cyclina orientalis* SOWERBY
7. マルスダレガイ科アサリ *Tapes (Amygdala) japonica* DESHAYES

II. 節足動物門 ARTHROPODA

蔓脚亜綱 CIRRIPEDIA

1. フジツボ類 *Balanidae* sp.

III. 脊椎動物門 VERTEBRATA

魚綱 PISCES

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

1. ニシン科マイワシ *Sardinops melanosticta* TEMMINCK & SCHLEGEL
2. スズキ科スズキ *Lateolabrax japonicus* CUVIER
3. アジ科 *Carangidae* sp.
4. タイ科 *Sparidae* sp.
5. サバ科 *Scorpaenidae* sp.
6. サバ科マルソオダ *Auxis tapeinosoma* BLEEKER

第7表 貝類構成比表

番 号		1			2		
		種 名	左殻/右殻	最小体数	%	左殻/右殻	最小体数
腹 足 網	クマノコガイ		0	0		1	0.46
	ダンベイキサゴ		1	0.49		0	0
	ス ガ イ		5	2.46		4	1.83
	オオヘビガイ		0	0		1	0.46
	フトヘナタリ		6	2.96		2	0.92
	イボウミニナ		75	36.95		57	26.15
	イ ボ ニ シ		0	0		1	0.46
	小 計		87	42.86		66	30.28
斧 足 網	カリガネエガイ		0	0	0/1	1	0.46
	イ ガ イ		0	0	0/1	1	0.46
	マ ガ キ	114/86	114	56.16	145/89	145	66.51
	ハ マ グ リ		0	0	3/0	3	1.38
	カガミガイ	1/0	1	0.49		0	0
	オキシジミ	0/1	1	0.49	0/1	1	0.46
	ア サ リ		0	0	0/1	1	0.46
	小 計		116	57.14		152	69.73
計			203	100.00		218	100.01

第8表 微小貝種名一覧表

A. 海 産

- ユキノカサガイ科コガモガイ *Collisella (Conoidacmea) heroldi* DUNKER
- カワザンショウガイ科クリイロカワザンショウガイ *Angustassiminea castanea* REINHARDT

B. 陸 産

- アズキガイ科アズキガイ *Pupinella (Pupinopsis) rufa* SOWERBY
- ケシガイガイ科スジケシガイ *Carychium noduliferum* REINHARDT
- キセルガイ科 *Clausiliidae* sp.
- オカチヨウジガイ科オカチヨウジガイ *Allopeas kyotoensis* PILSBRY & HIRASE
- コハクガイ科コハクガイ *Zonitoides (Zonitellus) arboreus* SAY
- ベッコウマイマイ科ウラジロベッコウマイマイ *Pseudhelicarion doenitzii* REIN HARDT
- キビガイ *Gastrodontella stenogyra* A. ADAMS

C. 不明1種

第9表 微小貝構成比表

番 号		1		2	
種 名		個体数	%	個体数	%
海 産	コガモガイ	5	1.26	2	0.66
	クリイロカワザンショウガイ	0	0	7	2.31
	小計	5	1.26	9	2.97
陸 産	アズキガイ	8	2.01	12	3.96
	スジケシガイ	8	2.01	5	1.65
	キセルガイ科	2	0.50	0	0
	オカチョウジガイ	100	25.13	79	26.07
	コハクガイ	27	6.78	16	5.28
	ウラジロベッコウ	220	55.28	148	48.84
	キビガイ属	28	7.04	33	10.89
	小 計	393	98.74	293	96.69
不 明		0	0	1	0.33
計		398	100.00	294	99.99

第10表 魚類構成比表 (計・%は脊椎骨のみ)

種名	番号	1	2	計	%
	部位				
マイワシ	主上顎骨 r		1	33	75.00
	脊 椎 骨	8	25		
スズキ	擬鎖骨 r	1		1	2.27
	脊 椎 骨		1		
アジ科	脊 椎 骨		2	2	4.55
タイ科	脊 椎 骨		1	1	2.27
サバ科	脊 椎 骨		2	2	4.55
マルソウダ	脊 椎 骨		5	5	11.36
計				44	100.00

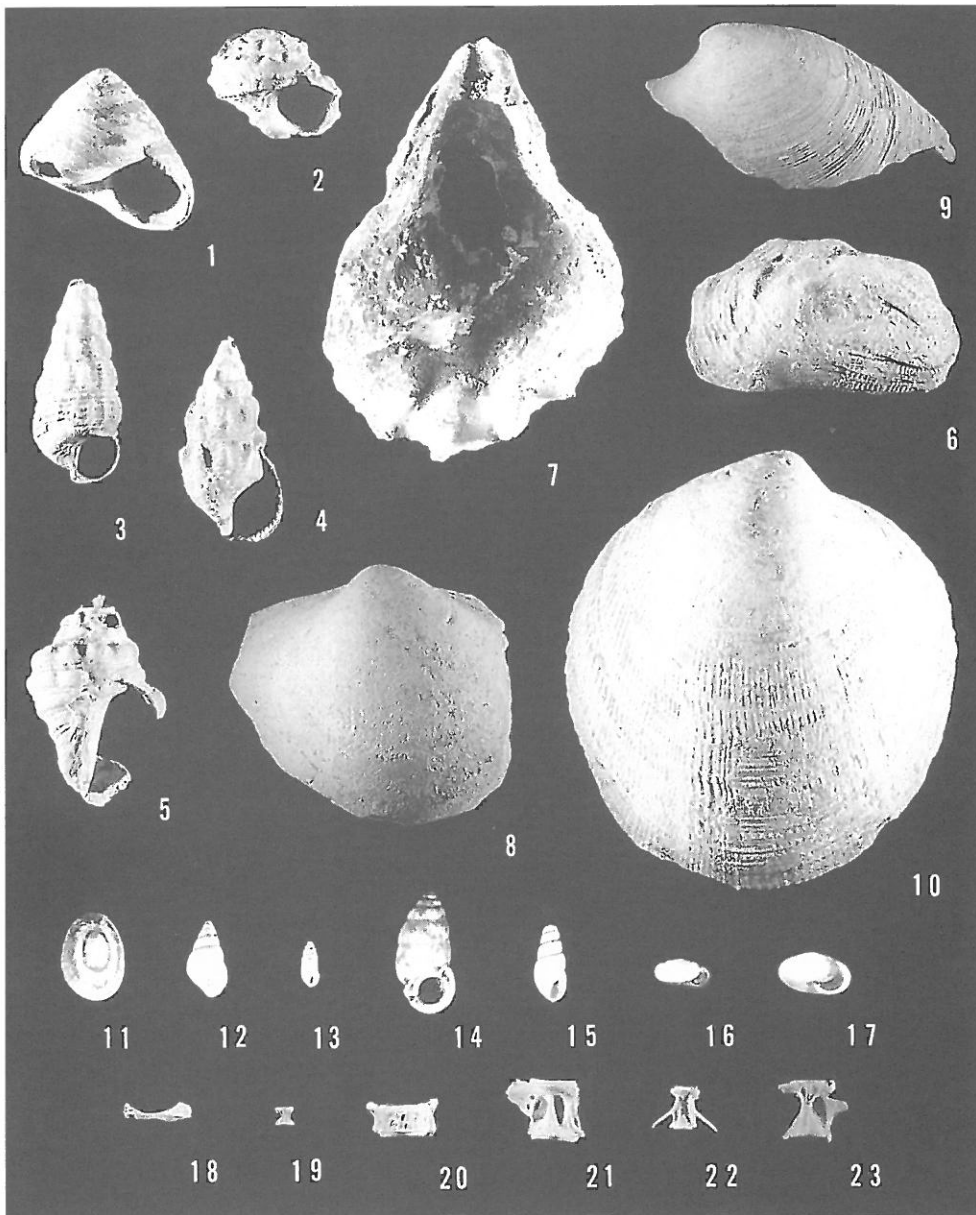


写真2. 貝類・魚類骨

貝類（1～10）・微小貝（11～17）・魚類（18～23）縮尺：微小貝のみ5倍，他は実大。

1：クマノコガイ，2：スガイ，3：フトヘナタリ，4：イボウミニナ，5：イボニシ，6：カリガネエガイ右殻，7：マガキ左殻，8：ハマグリ左殻，9：カガミガイ左殻，10：オキシジミ右殻，11：コガモガイ，12：クリイロカワザンショウガイ，13：アズキガイ，14：スジケシガイ，15：オカチョウジガイ，16：コハクガイ，17：ウラジロベッコウマイマイ，18：マイワシ右主上顎骨，19：同脊椎骨，20：スズキ脊椎骨，21：タイ科脊椎骨，22：サバ科脊椎骨，23：マルソウダ脊椎骨

第2章 出土土器についての総括

1. 第1次から第5次調査等で提示された平城貝塚出土土器についての一試論

第1次調査は、1954年、西田栄・鎌木義昌の両氏によって成された。その出土土器（挿図6，挿図7）を6類に分類された。即ち、磨消縄文土器（第1類）、縄文地系縁帯文土器（第2類）、磨消縄文鉢形土器（第3類）、沈線文系土器（第4類）、素（^①）縄文系土器（第5類）、無文土器（第6類）とするものである。

この分類は、両氏の鋭い土器観察力から導かれたものであったが、かかって形式分類による手法であり、分類された土器群相互の関係や、土器の編年的な推移については全く触れられなかった。（調査対象区 A. B. C）

第2次調査は、D区を発掘対象区として野平啓真によって成された。第1次調査区に隣接した場所でもあり、出土土器は第1次調査とほぼ同様の内容を示すものであった。『御荘町史・1970』に写真で載せられたもののうち、その一部を図示する。

第3次調査は、1972年、草地牲自によりE区を発掘区として実施された。その出土土器は、挿図8・9に示す如く、西田、鎌木による土器形式分類では律しきれぬものが多く、一見して平城式土器の持つ多様性を窺わせるものであった。その出土層位の精査などあまり問題にされない時期の発掘であったことは残念といえよう。

1978年には、後述する第5次調査区の北方15mの場所、岡原実氏宅で玄関補修のため1m×1m×1.3mにわたる土砂取り除きの祭に採取された土器について報告されている。挿図11に示すものである。従来からの平城貝塚出土土器とは様相を異にし、貝塚上層部からの採集だったことから平城上層部式土器の名が冠せられた。その有文深鉢形では、緩やかな波長部口縁に蛇行状・横S字状の粘土紐貼付を付す様相や、S字状文を平行斜交沈線で囲むⅡ文様帯の在り様から、高知県土佐清水市片粕遺跡出土土器を標式とする片粕式土器と対比されるものとされた。

第4次調査は、F区を発掘対象区として、1981年木村剛朗によって成された（挿図12）その出土の様相は、平城Ⅱ式土器を主体に若干の平城Ⅰ式土器を混えて出土した。^②また、貝層下からは、轟B式、船元式、宿毛式（新相）が出土し、貝塚上層から平城上層式、広瀬上層式、伊吹町式、その最上層から黒土BⅡ式、弥生期の拝鷹山式などの出土を見ている。

第5次調査はG区を対象として1995年、犬飼徹夫を調査主任として実施された。平城貝塚第5次調査報告書の本文編（御荘町教委1996）に示した如く、貝層中からは、前述した1978年報告の平城上層式土器を主体に伊吹町式土器、両者を繋ぐ広瀬上層式土器、素縄文土器が検出された。その他、この貝層は若干の宿毛式、松ノ木式、平城Ⅰ・Ⅱ式、鐘崎Ⅲ式、市来式系（御手洗C式）といった土器を混じえるものであった。また、貝層下からは、船元Ⅱ式、北白川C式といった中期土器が、貝層上面から滋賀里Ⅱ併行土器、九州側の古閑式といった晩期土

器が検出され、この地域の中期や晩期の土器文化の様相も窺い得る資料であり貴重なものとされよう。

以上、第1次から第5次にわたって出土土器の様相を概観したが、極めて残念なことに、第1次から第3次までの調査では、出土土器の層位的考察が成されておらずそこに視点をおく土器相互の対比が全くできないことにある。そんな中で、現時点で考察する限り、第3次調査出土土器の主要部分と第4次調査出土土器が注目される。

これらは、平城貝塚においては平城Ⅱ式と呼称されているものの、その土器相を子細に検討する限り、高知県中村市三里遺跡出土を標式とする三里式土器^⑤である。三里式土器は、河川端漁撈を生業とする性格を持ち、すでに愛媛県北宇和郡岩谷遺跡でも確認されており、深鉢有文土器の様相や、セットとなる浅鉢形土器、粗製無文深鉢土器といった器種構成も知られていた。

第4次調査出土土器として示した挿図12をもとに説明を加えよう。2として示したものが三里式土器である。この有文深鉢形土器は、口縁端外面から一段下がったところに僅かに粘土紐を貼布して肥厚部を形成させる。その施文は極めて特徴的で、Ⅰ・Ⅱ文様帯は波頂部でそれぞれ文様を異にし、決して単位文様の繰り返しという構図を採らない。併出する粗製無文深鉢形土器は、激しい条痕地(19、20)を持つものが多く、口縁端キザミ目で特色づけられる。またその鉢形土器は、半円ボール状の器形(11)を成し、円文風の文様集約部の直下に垂下線を付すことで特色づけられる。

その三里式土器をその標識地たる三里遺跡で見たいこう。挿図13に示す。1～9が三里出土、10は高知県の山間部、吉野川の上流部に位置する本山町松ノ木遺跡出土の浅鉢形土器である。まず、その有文深鉢形土器(挿図13の1)、粗製無文深鉢(2～6)、鉢形土器(7)を、平城第4次調査出土土器(挿図12)でのそれぞれの器種での土器様相と対比して、差異を認めることはできない。これらを三里式土器とする所以である。

この三里式土器は、松ノ木式土器の範疇で把えることができる。標式地たる松ノ木遺跡において、その有文土器の推移は(1) L字文の成立(2) 渦巻文の出現(3) 渦巻き連繫文の創成という形で考えられる。三里式土器は、その新相とされる(3)の段階の渦巻き連繫文期のもので、挿図13の10)で示した松ノ木出土の浅鉢形土器文様からの転移を、三里式土器の有文深鉢形土器(挿図13の1)に認めることが可能であろう。この渦巻き連繫文は、広義には瀬戸内側の津雲A式にも対比されることをここに付記しておきたい。

三里式土器は、平城貝塚において在地性を帯び、挿図12の1の如く、Ⅱ文様帯をその30に示した鉢形土器からの文様転移ともし得る斜行平行沈線化へと傾斜し、磨消縄文が崩れ始め縄文地上の沈線文へと変化する。挿図8で示した第3次調査での11も此の範疇で把えられよう。その一方、器形の変容も見られる。即ち、口縁部に貼布する粘土紐の位置が下降し始め、次第にその省略化へと推移する。その中に、頸部をミガキによって作成しようとする意図を持つ土器も認められる。これらの土器の中には、口縁外面施文と完全に分離された土器内面施文を持つ土器^⑩も現出する。

これらは、平城貝塚における三里式系土器とされるが、ここでは、挿図12の2で示した有文

深鉢形土器及びそのセットを成す土器のみ三里式土器と呼称し、その他は学説史的意味を含め、従来通り平城Ⅱ式土器との呼称を温存しておきたい。この平城Ⅱ式土器は、第5次調査で主体を成す平城上層式（片粕式）土器、広瀬上層式土器、伊吹町式土器へと推移していくこととなる。これについては、別項を立て林潤也によって言及される。

つぎに平城Ⅰ式土器について触れていこう。まず、前述した平城Ⅱ式土器の土器変容の推移の中に、瘤状突起を成す器形や二本沈線で描く独得の鉤状入組文が参与する余地は全く存在しない。平城Ⅰ式とそのⅡ式は、同一系列の中で把えることは出来ない。異質の土器と断ぜざるを得ない。さすれば、集落遺跡たる平城貝塚に、山間部河川端漁撈を生業とする平城Ⅱ（三里式）集団と、大分県小池上層式を指標とする豊後水道海洋漁撈集団との重複的生活跡としての性格が付与されよう。このことは、対岸、小池原貝塚で平城Ⅱ式タイプの土器がほとんど検出されず、三里遺跡において全く平城Ⅰ式土器を見ぬことから強固とされる見解と断じたい。さらには平城Ⅰ式とⅡ式との異質性おも強固にし得ることに論を持たないのである。その平城Ⅰ・Ⅱ式の編年的位置について言及することは慎重たらざるを得まい。それは、すでに述べた如く、両者ともに採集されている第1次～第3次調査において、全く層位的考察が問題にされない時期の調査であった事に拠る。また、広域的な分布を示す入組文土器が、各地でどのように変化するのか、その編年的位置をどう考えるかなど、平城Ⅰ式に関わる見解が明確に示されていないことに起因する。両者は併存するのか、いずれかが先行するのかは、今後においても重要な課題である。

しかし、その一方で、松ノ木式遺跡で検出された松ノ木式土器の中に、その祖型たる宿毛式土器の中の福田KⅡタイプが依然として残存していることが報告されており、注目したい。^①恐らく福田KⅡ式に始源を持つ入組文は、西瀬戸内や山陰西部、四国西南部、南九州といった地域では、松ノ木式期（広瀬土抗40段階—千葉豊1989）に至っても残存し、平城Ⅰ式は、その四国西南部での福田KⅡ式（宿毛式）系最後の姿とする見解を捨て難いとするのが筆者の立場である。参考までに、宿毛式土器から平城Ⅰ式へと繋かれる要因を図示しておきたい。（挿図14）

本稿を草するにあたり、阿部芳郎、今田秀樹、木村剛朗、幸泉満夫、千葉豊、前田光雄、三輪晃三、水ノ江和同、柳澤清一の諸氏の論考を始め、種々のご教示をたまわったことを記し感謝申し上げます。

（註）

- ① 西田 栄 鎌木義昌『伊予平城貝塚』御荘町教委1957
- ② 野平啓真 『御荘町史』御荘町1970
- ③ 草地牲自 「平城貝塚第3次発掘調査概報」『愛媛の文化13』1973
- ④ 犬飼徹夫 「平城上層式土器について」『古代文化No.231』1978
- ⑤ 木村剛朗 『平城貝塚—平城貝塚第Ⅳ次発掘調査報告書』御荘町教委1982
- ⑥ 犬飼徹夫 「西南四国の縄文式土器型式研究の現状と問題点」—「伊吹町式土器」『遺跡NO.34』1993
- ⑦ 木村剛朗 「広瀬遺跡」 『四万十川流域の縄文文化研究』1987
- ⑧ 岡本健児・木村剛朗 『三里遺跡』中村市教委1978
- ⑨ 前田光雄・出原恵三 『松ノ木遺跡Ⅰ～Ⅳ』本山町教委1992～1996

- ⑩ この手の土器は、犬飼徹夫「平城貝塚出土Ⅱ式土器の再検討」『古代吉備NO.15』1993の中で紹介されている。
- ⑪ 前田光雄は『松ノ木遺跡Ⅲ』P.59、P.106で、松ノ木式土器の中で認められる入組文土器が平城Ⅰ式土器へと推移すると説いている。氏の平城式土器編年観に立脚するものであろうが、注目される記述である。
- ⑫ その類例として、崎ヶ鼻出土の磨消縄文土器（佐々木・小林1937）や、松山市南海放送出土土器（宮本一夫1990）を挙げておきたい。

〈主要参考文献〉

- 千葉 豊 縁帯文系土器群の成立と展開 『史論72-6』1989
- 木村剛朗 『四国西南沿岸部の先史文化』 幡多埋文研1995
- 三輪晃三 「九州阿高式系・縁帯文系土器群の研究」『奈良大大学院研究年報No.1』
- 柳澤清一 「縄文後期初頭末～中葉における広域編年軸の検討」『古代101』1996
- 本稿中で述べている「発掘対象区」は、第5次発掘調査報告書の『本文編1996』P.7を参照していただきたい。
- 本稿を、1997.1.15日に召されたニシダ・ニコラス・サカエ（西田栄）の学恩に深甚の謝意をもって捧げるものであります。

2. 平城上層式土器（片粕式土器）の性格とその分布

はじめに

平城上層式土器^①（片粕式）は、西南四国の縄文後期を代表する土器型式として広く知られている。しかし、その実態は十分に把握されているとは言い難く、多くの問題を抱えている。本稿は、平城上層式に関わる20年余りの研究史を振り返ったうえで、器種構成・分布範囲といった実態解明に必要不可欠な課題について取り組むとともに、成立および終焉に関わる諸問題についても述べていきたい。

研究史

(1) 1970年代

1973年、高知県土佐清水市の片粕遺跡の発掘調査が行なわれ、「片粕式土器」と名付けられた新型式の土器が大量に出土した。1975年に刊行された同遺跡の報告書^②において、片粕式は、「縄文地に直線文を組み合わせて一種の幾何学的文様を構成する一群の土器で、平城式土器について編年される新型式の土器である。」と説明され、その特徴とともに時間的位置付けが示されている。

1974年、木村剛朗は片粕遺跡採集の片粕式土器の紹介を兼ねて論考を発表した。^③それによると、「平城式の強い伝統と、広瀬上層式^④にみる一般的な特徴をかねそなえている」とし、「移行期様相」として位置付けている。そして、「平城式→片粕式→広瀬上層式→伊吹町式」という編年案を示し、形式変遷にみられる西南四国の地域性を強調した。

また同年、同じく木村は改めて広瀬上層式土器についても見解を示した。^⑤平城式と伊吹町式のヒアタスをうめる片粕式を認識することによって、それまで西平系土器としてしか理解されていなかった広瀬上層式・伊吹町式に対して、先後関係を認めるとともに、地域的な色

彩の強い変遷過程の中で生成したと論じた。

1976年、犬飼徹夫は、これまで位置付けがあいまいであった平城式土器の再検討を行い、^④瀬戸内側・九州側のそれぞれに出自をもつ土器群の総体とする従来の見解を否定し、地域的主体性のある土器群として再評価した。また、平城第1類→平城第2類という変遷案を提示するとともに、平城第2類から「極めて無理のない変容を示す片粕式土器に移行する。」とし木村の研究を踏まえながらも、より明確に片粕式の祖形を示そうとした。

1978年、同じく犬飼は、平城貝塚において採集された片粕式と同様な属性をもつ土器群を「平城上層式土器」と呼称し、資料紹介を兼ねた論考を発表した。^⑦それによると、「この種の土器は、平城第2類に密着した形でその上層において発見された」、「平城第2類から系譜を引くものであることは論を待たない」、「広義の平城式土器として一括されなければならない性格とすべき」という理由から、平城貝塚の資料に限って「平城上層式」という型式名を用いたことが述べられており、平城第2類の発展形態としての位置付けが強調されている。また、他地域の土器との類似性も指摘しており具体例として京都府桑飼下遺跡の出土資料や、^⑤九州の北久根山式^⑧を挙げている。

1970年代には、片粕式（平城上層式）が認識されたことにより、西南四国における縄文時代後期中葉～後葉の土器編年が、より系統的に把握されるようになった年代といえる。また、この時期の研究の特徴として、土器変遷における「地域性」が強調されたことが挙げられよう。その要因として、西南四国内で資料が蓄積されていなかった1970年代以前の研究の重点が、他地域との比較に置かれていたことに対する「反動」があったとも考えられる。

(2) 1980年代以降

1981年、高橋信武は、片粕系土器の編年細分化を目指した論考を発表した。^⑩その中では細分の指標として、有文深鉢の口縁部の形態及び文様の相関関係を特に重視した。具体的には、「Ⅱ文様帯（頸部）が長大化するにつれ、Ⅰ文様帯（口縁部外面）が狭まり、本来長いⅠ文様帯に収まっていた…（中略）…最上部の列点文をⅣ文様帯（口唇部）、やがてⅤ文様帯（口縁部内面）に移動させる動きとして現れるのである。」という表現に示されている。こうした型式変化の方向性を基に、片粕系土器を6型式に細分し、Ⅰ～Ⅲ式を片粕式Ⅰ～Ⅲ式に、Ⅳ式を広瀬上層式、Ⅴ式を小牧式、そしてⅣ式を伊吹町式に比定した。片粕式→広瀬上層式→伊吹町式という変遷が明らかな以上、片粕Ⅰ式→Ⅱ式→Ⅲ式と示された型式変化の方向性には十分な説得力がある。またこの論考では、周辺地域との関連についても言及し、九州の土器（北久根山式、西平式）に対しても考察するとともにそれらと片粕系土器の時間的關係について論述している。そこでは、「積極的根拠に欠ける」としながらも、片粕Ⅰ式を北久根山第一型式後半、片粕Ⅱ式を北久根山第二型式、片粕Ⅲ式を北久根山式末期として、それぞれ併行関係を求めている。

こうした高橋の指向性は、1970年代の研究とは一線を画すものであり、その成果は後の研究動向に大きな影響を与えたと考えられる。

1989年、山口信義は、響灘・周防灘沿岸部の北久根山式併行期の土器（菊水町式）を論じる中で、近隣地域の現状として片粕式についても言及している。^⑪そこでは片粕式の細分

について触れ、平城上層式土器B類が片粕遺跡出土の片粕式土器の祖形になるという見解を示している。平城上層式土器B類とは、「口縁部は横走する平行沈線がその末端部で2～4本の縦位の短沈線と化し、これが左右相称となる」、「波状口縁の場合は、波頂部直下に短沈線をおき、文様集約部を形成をする」土器群を指しており、これが片粕遺跡出土の片粕式土器の主体をしめる「口縁と上胴部に平行直線と波状文を組み合わせる一種の幾何学的文様を構成する」土器群に先行することを示唆している。この論考の中心的なテーマが片粕式ではないため、詳しく述べられてはいないが、興味深い見解と言えよう。

1994年、犬飼徹夫は、「平城Ⅰ式→Ⅱ式」変遷論を主張する中で、平城Ⅱ式と片粕式（平城上層式、平城Ⅲ式）の類似性を指摘した。特に磨消縄文技法を用いず縄文地に沈線のみを施すという共通性を重視するとともに、片粕式にみられるLR縄文の多用を、北白上層3期の分化波の影響としてとらえた。

1995年、木村剛朗は、西南四国の沿海部に所在する先史遺跡を集成し、その中で片粕遺跡、平城貝塚についても大きく取り上げている。その資料の中で、最も注目すべきものは、田手氏宅の改築に伴い採集された平城貝塚の土器群である。この資料は、数点を他型式を除いたほかは、すべて片粕式（平城上層式）であり、良好な単純期の資料が未発見であるため不明な点の多い、当該期の様相（器種構成など）をうかがい知ることができる。また、この著書の中では、片粕式土器に関する氏の考え方も明らかにされている。まず、片粕式の成立に関しては、平城Ⅰ式の新しいタイプ（＝鐘崎式系土器）を祖形として、そこに「東方（北白川上層3期）の土器文化の影響」を受けて生成したと述べている。具体的には、胴部文様を在来の要素から求め、口縁部形態やLR縄文の多用を東方からの要素としてとらえている。また、分布範囲についても考察し、その東限の様相を明らかにするとともに、片粕式の分布域が平城Ⅰ式の分布範囲に重なることを指摘し平城Ⅰ式と片粕式との近縁関係を示すものとしている。

このように1980年代以降は、資料も少なからず増加し、片粕式の成立・展開に関する諸問題に対して、様々な視点から論議が交わっている。それと共に、周辺地域との時間的・系統的關係についても考察されつつある。しかしながら、片粕式の実態解明には程遠く、その研究には多くの課題が残されているといえよう。

器種構成

これまで、平城上層式の器種構成については、当該期の一括資料に恵まれず、十分に把握し得なかった。また、今回の平城貝塚第Ⅴ次調査でも器種構成を理解するうえでは必ずしも良好な出土状況とはいえず、今後課題を残した。

このような状況の中で、1995年、木村剛朗により、平城上層式のほぼ単純期に相当する平城貝塚の採集資料が紹介された。この土器群は採集資料ではあるが、採集期間、地点が同一であり、当該期の土器様相をうかがい知るうえで参考となる資料として評価できる。

ここでは、木村の研究成果などを踏まえ、平城上層式を構成すると考えられる器種を、有文深鉢A・B類、無文深鉢、有文鉢A～C類に大別し、さらに必要なものについては細別を行った上で、順次説明をしていきたい。

有文深鉢A類（挿図1. 1～11）

口縁部と胴部上半を施文部位として、縄文地に直線文、曲線文などを組み合わせ、一種の幾何学的な文様構成を有する一群である。器形は、内湾する口縁部から、長めの頸部を経て、やや張った胴部に至る。底部はレンズ状の上げ底である。

平口縁と波状口縁の2種があり、後者の波頂部には、横S字状の貼付文が特徴的である。胴部文様は、文様帯の上端と下端に平行沈線をめぐらし、その間に斜行沈線を施すことにより三角形状の文様を連続させ、その中にS字状の曲線文を配するタイプが主体を占めている。ここでは、口縁部文様により、A-1類～5類に細分する。

有文深鉢A-1類（挿図1. 1～3）

口縁文様として、平行直線と波状文を組み合わせる一群である。連続した短沈線を加えるものもある。

有文深鉢A-2類（挿図1. 4～6）

口縁部の平行直線の末端部に、縦位の短沈線を繋げる一群である。

有文深鉢A-3類（挿図1. 7. 8）

波頂部直下の縦位の沈線が、口縁部をめぐる平行直線を分割する一群、あるいは、縦位に肥厚部を持つ一群である。縄文地に沈線のみを施すタイプのほか、磨消縄文を施したものや、縄文を用いないものも認められるようである。胴部文様は明確ではないが、他のA類と異なるものも存在すると考えられる。

有文深鉢A-4類（挿図1. 9. 10）

波頂部直下に、文様集約部を形成する一群である。

有文深鉢A-5類（挿図1. 11）

外反する頸部から、明確な境を持たず緩やかに内湾する口縁部に連続する器形で、文様は、口縁部に縄文をめぐらし、1条あるいは2条の横位の沈線を施す一群である。胴文様は不明である。

有文深鉢B類（挿図2. 12～14）

口縁部と胴部に縄文のみを施した一群である。器形は口縁部形態を除き、有文深鉢A類と同様である。口縁部は、頸部からそのまま開くタイプが多いが、有文深鉢A類と同じく内湾する口縁部を有するものもある。ここでは、口縁部内面の施文の有無により、B-1類とB-2類に細分する。

有文深鉢B-1類（挿図2. 12. 13）

口縁部内面に文様帯を有する一群である。内面の文様により、a・bに細分する。1a類は、口縁部内面に縄文帯をめぐらす一群で、その下端に横位の沈線を施すものもある。1b類は、波頂部のみ縦位・斜位の沈線などを施す一群である。

有文深鉢B-2類（挿図2. 14）

口縁部内面に文様帯を持たない一群である。

無文深鉢（挿図2. 15. 16）

器形は有文深鉢B類と同様である。口縁部の形態も有文深鉢B類と同様に外反するものと内湾するものの2タイプ認められる。

有文鉢A類 (挿図2. 17. 18)

頸部を持たず、椀形を呈する一群の土器である。文様は、磨消縄文を用いて幾何学的なモチーフ形成するものが主体を占める。また、少量ながら、縄文地に沈線を施すのみのタイプや、縄文を用いず沈線及び刺突のみのタイプも認められるようである。なお浅鉢として認識可能なものも含まれている可能性がある。

有文鉢B類 (挿図2. 19. 20)

頸部から口縁部にかけて大きく外反し、胴部には屈曲部を有した一群の土器である。口縁部に縄文をめぐらし、胴部上半には、磨消縄文を用いて三角形モチーフを基調とした文様を施している。

有文鉢C類 (挿図2. 21)

短く外反する口頸部から、器高の低い胴部へ繋がる器形を呈するもので、口縁部と胴部に縄文のみを施した一群である。

このほかに、注口土器が確認されている。また、周辺地域の状況から無文の鉢、浅鉢等を伴う可能性も高い。

以上、平城上層式期の器種構成を提示した。つづいて、これに基づき器種ごとに若干の考察を行ないたい。

有文深鉢A類

平城上層式を最も代表する器種であり、指標となるものである。文様については、西南四国の独立性を感じさせ、器形からは周辺地域との強い関連をうかがわせる。

器種組成率は明確にできないが、周辺地域の併行期^①の同類に対応する一群（意匠文様を持つもの）の組成率と比較してみても、周辺地域のそれよりも高い比率を示すようである。

また、A-1～5類に細分したが、典型的なものはA-1・2類であり、3～5類としたものについては、同類と一括してよいものか疑問も残り、今後検討する必要がある。

A-1類は、A-2類とともに平城上層式の指標となるものである。出土量はA類の中でも最も多く、平城貝塚^②、片粕遺跡^③などで安定した出土状況を示し、一定期間の存続を予想させる。幅広の口縁部文様帯には大型の波状文、幅狭の口縁部文様帯には低い波状文という対応関係が認められ、前者から後者へという変遷が想定されている。後続する広瀬上層式との関連を考慮した場合、口縁部文様帯の幅狭化、波状文の退化そして消滅、短沈線の施文部位の変化（口縁外面から口唇部へ）という属性変化の方向性は、十分な説得力があるといえよう。しかしながら、波状文を含めた口縁文様の祖形が把握できない以上、このA-1類の細分については、全ての課題が解決したわけでもない。特にこの点は、平城上層式の成立にも関わる重要な問題として注意する必要がある。

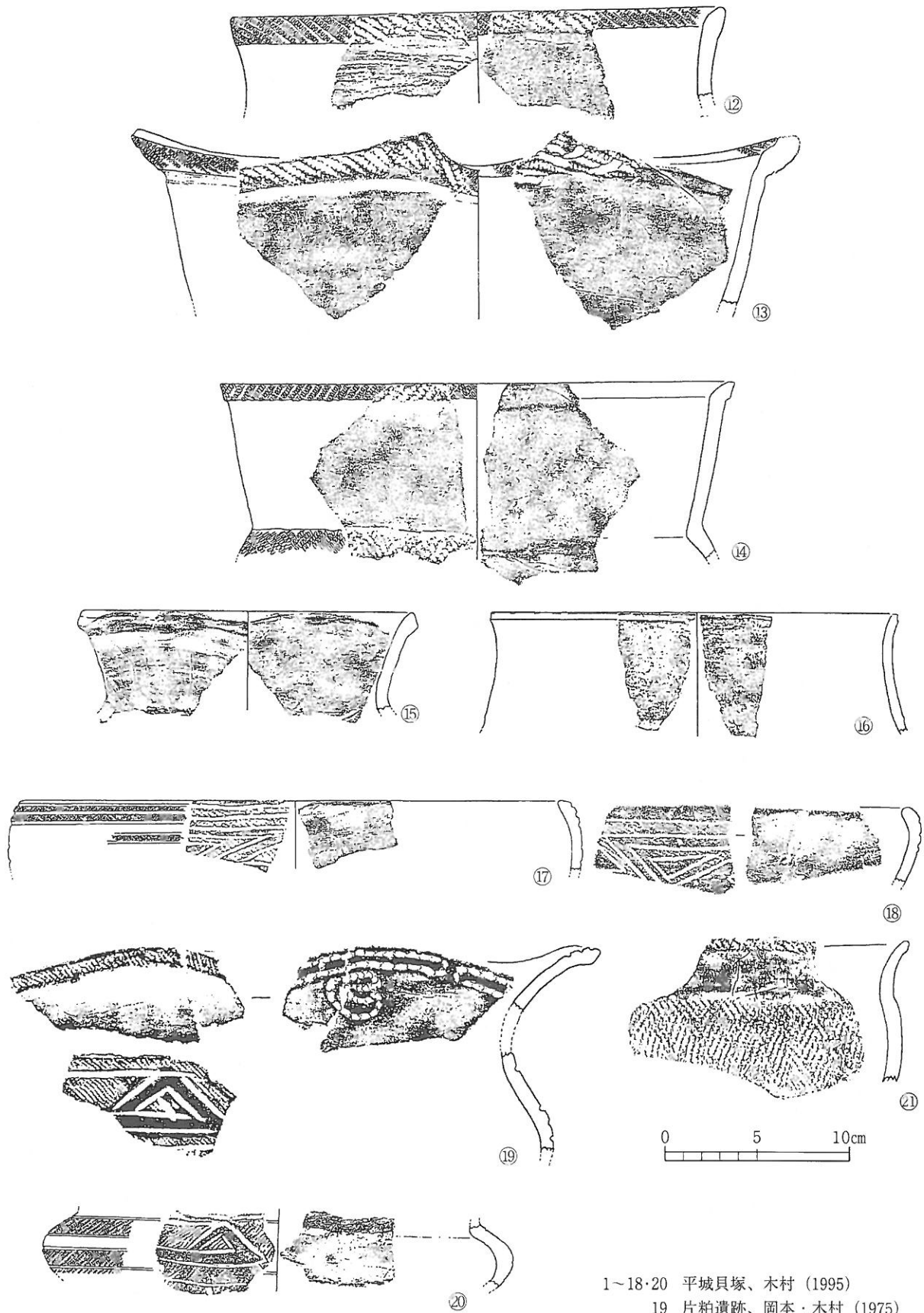
A-2類も出土数は比較的に多い。しかし、A-1類と比べて、各遺跡ごとの出土状況はやや異なっている感がある。これは、地域的な偏在性を示しているのではなく、時間的な傾向を反映している可能性が高い。同類が、後続する広瀬上層式の主体を占めることを考慮すれば、平城上層式の中でも新しい段階に増加するものとも考えられよう。

A-3類は、出土総数は多くはないものの、平城貝塚、岩谷遺跡、^④ 広見遺跡^⑤、片粕遺跡^⑥で確



挿図1 平城上層式土器 (1)

1・11 片粕遺跡、木村 (1974) 8 広見遺跡、木村 (1995)
 2~7 平城貝塚、木村 (1995) 9.10 片粕遺跡、岡本・木村 (1975)



挿図2 平城上層式土器 (2)

認められている。肥厚部の有無があることは先に述べたが、それらが、バリエーションとして存在するのか、時間的な傾向を持つのかは不明である。しかしながら、岩谷遺跡の出土例を見る限り、平城上層式期における時間的あるいは空間的偏在性を認めることができるかもしれない。ところで、このA-3類の類例は、周辺地域にも存在するようである。京都府桑飼下遺跡（北白川上層3期）では肥厚性を持つタイプの類例がみられ、一方岡山県津島岡大遺跡（彦崎K2式に先行する土器群）では肥厚部を持たないタイプの類例がみられる。また、東九州（北九根山第二型式）では、肥厚性を持つタイプの類例が多く遺跡で出土し、東九州の地域性として理解されている。今後、周辺地域（特に東九州）との関連を含め、より系統論的な検討が必要であろう。

A-4類は、出土数が僅少であり、これまであまり注目されることはなかった。ここでは、挿図1.9.10のような渦巻き文を主文様とする同類を、在来の要素としてではなく、周辺地域との関連の中で捉えたい。波頂部直下に渦巻き文を持つこのタイプの土器は、併行期といわれる北白川上層3期、彦崎K2式およびそれに先行する土器群（以下、彦崎K2式系土器）、北久根山第二型式のいずれにもみられる。特に瀬戸内では近年、資料の増加に伴い研究が進み、多角的な視点から彦崎K2式系土器の細分が行われている。その成果によると、彦崎K2式系土器の口縁部の主文様（渦巻き文）の消失過程を読み取ることができる。A-4類の要素がどこからもたらされたにより、その意味付けは大きく異なるものの、細分の方向性を示すだけでなく、広域な編年の一指標となり得るかもしれない。

A-5類は、出土数は僅少であり、片粕遺跡や広瀬遺跡で散発的に確認される程度であり、時間的な位置付けも困難である。ただ、広瀬遺跡で出土している点を考慮すれば、新しい様相として捉えることができるかもしれない。A-5類に類似した例として、岡山県百間川沢田遺跡（四元調査区）や大分県佐知遺跡を挙げることができよう。

有文深鉢B類

各遺跡で比較的まとまって出土している。元々、外来の器種と考えられるが、尻貝遺跡で確認されたように、平城I・II式期には確実に存在し、平城上層式期にはその組成率が高まるようである。さらに周辺地域をみると、桑飼下遺跡（北白川上層3期）では数%、津島岡大遺跡（彦崎K2式系）では約40%、百間川沢田遺跡（彦崎K2式系）では25%の組成率を示しており、瀬戸内地域での高い比率が注目される。

本稿では、B-1類をさらにa類とb類に細分したが、a類の分布の中心が瀬戸内地域にあることは明かであり、その地域において研究も進められている。しかし、b類については、高知県田村遺跡や平城貝塚・片粕遺跡のほか、東九州においても少なからず確認されているものの、不明な点が多い。今後は、系統論的な問題を中心とした検討が必要であろう。

無文深鉢

平城上層式にも確実に伴うが、その組成率は決して高くないようである。確実な共伴例が少ないうえに、形態にバリエーションが多く、容易に検討することはできないが、周辺地域との組成率の相違は明らかである。つまり、近畿・瀬戸内・東九州のいずれの地域と比べても、西南四国での組成率は明らかに低く、平城上層式の器種構成上の特性の1つとして認識できるか

もしれない。

有文鉢A類

平城貝塚、片粕遺跡で出土例が知らされている。出土総数が少ないため、時間的・系統論的な検討は困難であるが、類例は近畿・瀬戸内地域でも出土しており、関連が注目される。しかし一方で、文様構成に相違点もみられる。すなわち平城上層式では、三角形あるいは山形のモチーフが多く、方形区画などのモチーフが若干認められる程度である。しかしながら、周辺地域では方形区画文や渦巻き文をモチーフにしたものが圧倒的に多いようである。この文様構成の相違は、平城上層式の特徴として理解することができよう。

有文鉢B類

平城貝塚、片粕遺跡などで出土例が知られ、九州の北久根山式との関連が指摘されている。北久根山第二型式では、器種組成率としては高い値は示さないものの、代表的な鉢形土器として当該期の各遺跡で確認されている。また、出現時期については議論があるが、鐘崎系土器からの型式変化を経て、北久根山第一型式の後半期には存在したと考えたい。その後、豊後水道を越え西南四国へ伝播したことが想定され、平城上層式と北久根山式との近縁関係を示唆する資料としても重要である。

有文鉢C類

出土数は、決して多くないようである。有文深鉢B類と同様に、周辺地域から伝播してきたものと考えられる。平城上層式に伴うものは、有文深鉢B類との中間的な形態が目につき、器種分化の不明瞭さが指摘できよう。

注口土器

筆者の知るかぎり、高知県西分増井遺跡で確認されているのみである。ただ、この遺跡では平城上層式と北白川上層3期の土器が混在し、西南四国の様相とは異なっている点は注意を要する。しかしながら、周辺地域の状況から判断して今後の資料の増加が見込まれ、東日本をも視野にいたした広域編年の指標として期待できよう。

この章では、不十分ながら平城上層式の器種構成を提示したうえで、器種ごとに若干の考察を行なった。その結果、それぞれの器種において周辺地域との関連性に相違を認めることができた。現状では資料的な制約が大きいため、厳密な器種構成を示すことは困難であり、十分な考察も行なえないが、複雑な様相を呈する当該期の土器群を検討していくうえで、複数の器種を対象とした分析は重要といえよう。

分布域について

平城上層式の分布については、1981年に高橋信武、1995年には木村剛朗によってすでに論及されている。高橋は、片粕系土器の細分を試みた論考の中で、西南四国だけではなく、東九州の片粕系土器についても集成し検討した。一方木村は、近年の出土事例を含めた西南四国の片粕式を再集成するとともに、その分布の東限の様相について詳述した。

挿図3は平城上層式出土遺跡と関連遺跡の分布図である。これを見る限り、分布の中心が西南四国沿岸部及び四万十川流域にあり、その地域を軸として、高知県中央部から東九州、遠くは熊本県にかけて帯状に分布していることがわかる。こうした分布範囲の中でも土器様相から

いくつかの小地域に分けられるようである。資料的な制約から積極的に述べることはできないものの、本稿では木村剛朗の示した東限の様相を紹介するとともに、九州地域の様相についても述べていきたい。

まず、東限についてであるが、現時点では高知県中央部の西分増井遺跡にあるようである。しかしこの遺跡では、北白川上層3期の土器と混在した出土状況を示し、西南四国沿岸とは異なった様相を呈している。また、この遺跡からやや東部の田村遺跡^⑤では平城上層式は全く見られず、より「畿内的色彩濃厚な様相」を示しているという。

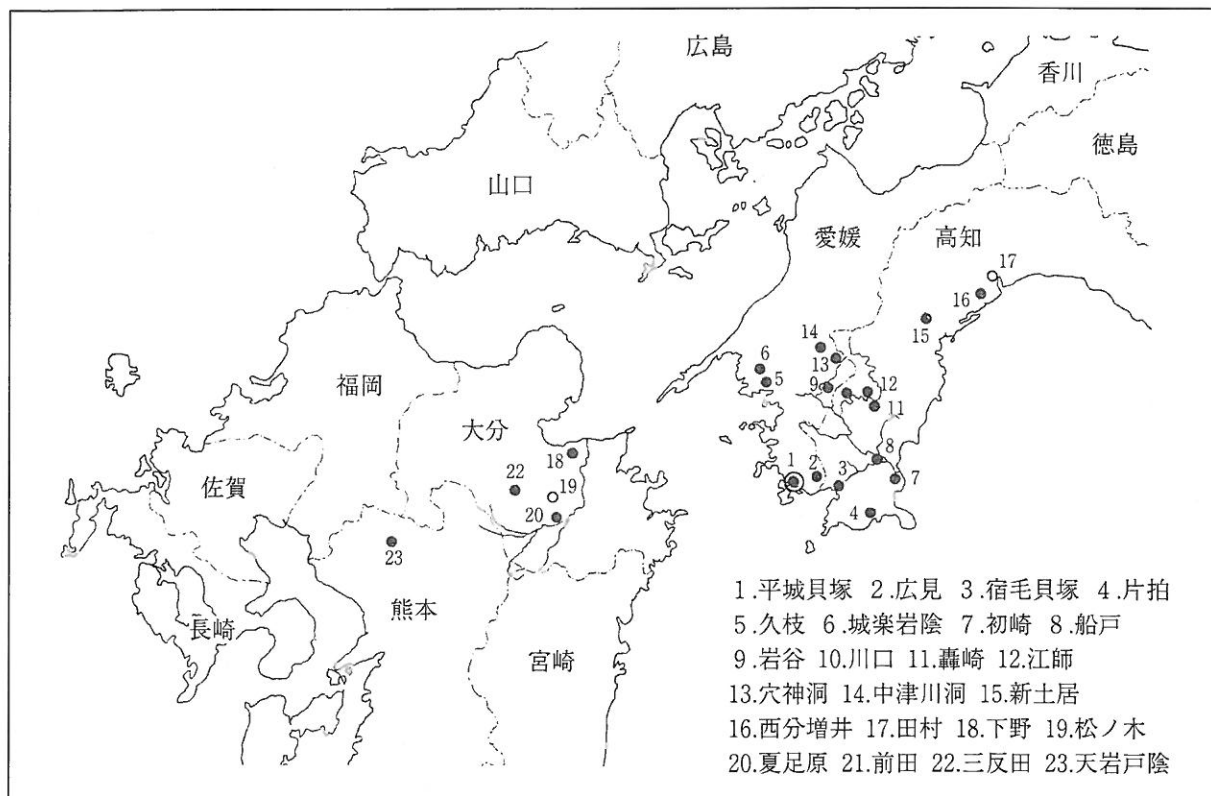
続いて、九州の平城上層式の様相についても触れておきたい。まず、出土遺跡であるが、有文深鉢A-1・2類の口縁部のみを対象とした場合、大分県下郡遺跡、夏足原遺跡^⑥、三反田遺跡^⑦、前田遺跡^⑧、熊本県天岩戸岩陰遺跡^⑨で確認されている。遺跡数・各遺跡ごとの出土量ともに少ないため、客体的な在り方を示しているようにみえるが、どうであろうか。まず、三反田遺跡出土の提示した2点の資料を検討したい。挿図4の1は典型的な平城上層式といえるが同図2は文様モチーフ自体は酷似しているものの、磨消縄文を施している点と口縁端部の形状から、平城上層式の範疇に含めることは困難である。しかし、この2点の類似性を重視すれば、2を1の変容形態として捉えることも可能ではなかろうか。つまり、本来縄文地に沈線を施すという手法を持たない九州では、在来の磨消縄文技法が多用されたほか、その他の属性についても「在地化」が進められた結果として、挿図4の2のような土器が生成したと考えられるのである。また、高橋信武によって仮称された松ノ木式^⑩（挿図4の3）も、有文深鉢A-1類からの変容形態として先の事例と同様に理解することができるかも知れない。このような事例が平城上層式からの変容形態として認められた場合、これらの類似した例が大分県内の複数の遺跡で確認されており、平城上層式が、東九州の北久根山併行期の一様相の形成に深く関与したことは明白といえる。

こうした西南四国と九州の関連を示す資料として、挿図4の4を参考までに紹介したい。この土器は今回の調査で出土したもので、四国においては初見の資料である。しかし、同様の資料は、現時点では福岡県東部沿海地域（黒崎貝塚^⑪、菊水町遺跡^⑫、山崎・石町遺跡^⑬など）に限り分布しており、この地域の北久根山式併行期の地域性^⑭を端的に示す土器群といえる。また、この福岡県東部沿海地域が平城上層式の分布域と異なる点についても、留意しておきたい。

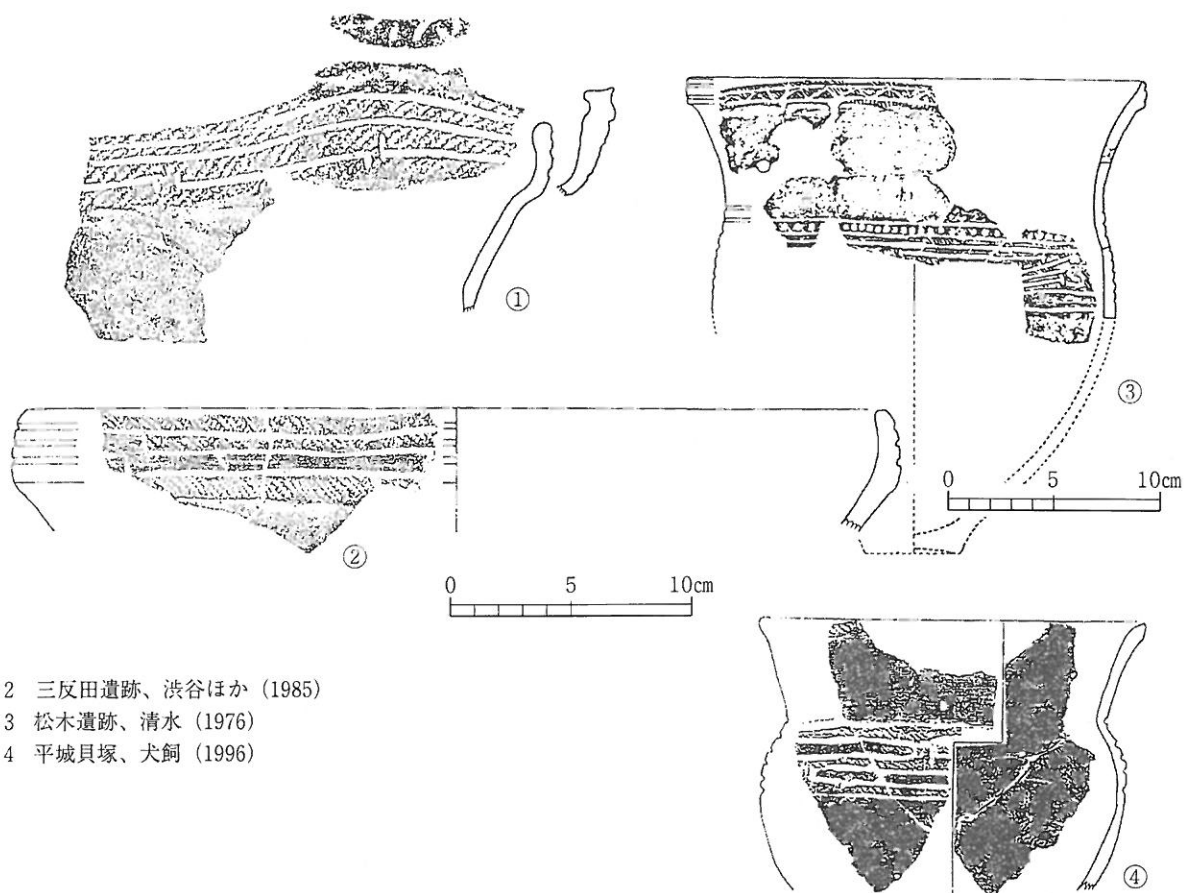
これまで、高知県中央部及び東九州の様相について述べてきたが、今後は愛媛県中予・東予地域の様相の解明が重要になると考えられる。この地域には、彦崎K2式系土器とともに、上野Ⅲ式^⑮と呼ばれる平城上層式に類似した土器郡が分布している。将来、この地域での資料が蓄積されれば、平城上層式の北限の様相を把握できるだけでなく、彦崎K系2式土器との時間的關係についても考察することができるであろう。

平城上層式の成立

平城上層式の祖形に関して、2つの見解が示されていることは、研究史で述べたとおりである。つまり、犬飼徹夫は平城Ⅱ式^⑯を、一方木村剛朗は平城Ⅰ式の新しいタイプ（＝鐘崎式）を祖形として挙げている。しかし、この論議の背景に、1990年以降の平城Ⅰ・Ⅱ式土器の逆転・非逆転論争が大きく関連していることは言うまでもない。「平城Ⅰ式→平城Ⅱ式」説に^⑰



挿図3 平城上層式土器出土遺跡関連遺跡分布図



挿図4 平城上層式関連資料

立つ犬飼は、設定当初から、平城上層式と平城Ⅱ式の類似性を強調してきたわけであるし、逆の立場に立つ木村にとっては、平城Ⅱ式よりも平城Ⅰ式との近縁関係を指摘することによって、自説の正当性を主張してきた。

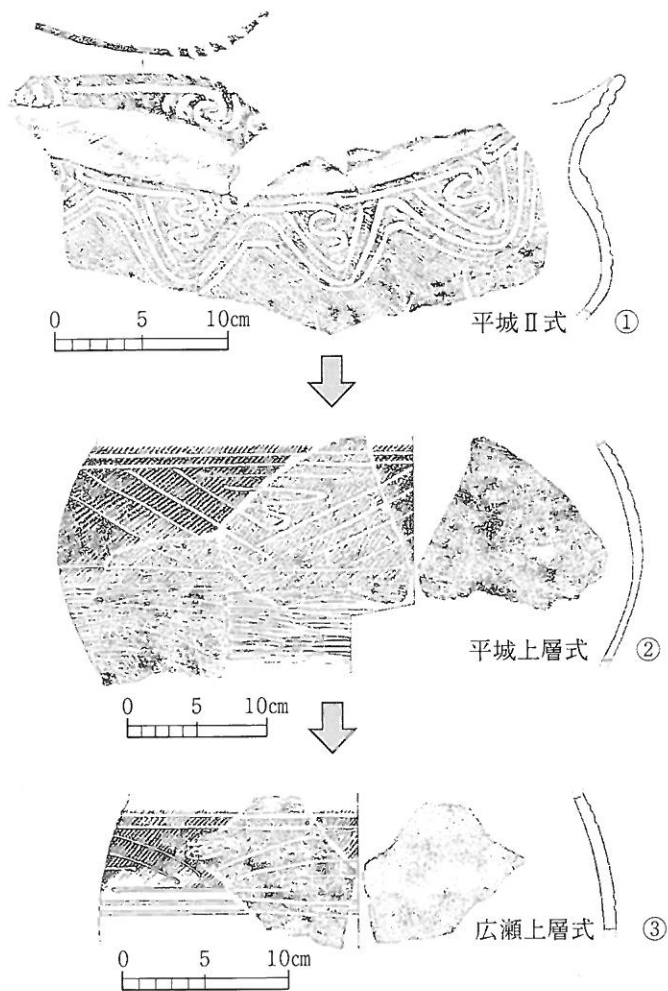
このように、祖形に関しての両説の対立が解決をみない根本的要因として、平城Ⅰ・Ⅱ式の内在的な変化のみでは、平城上層式へのスムーズな変遷が辿れないと言う現状がある。そこで、近年注目されているのが、近畿地方（北白川上層3期）の影響である。この点については、両者ともほぼ同様の見解を示しており、具体的な影響として、LR縄文の多用、口縁部形態の類似などが挙げられている。

平城上層式の成立に関して、両者の説の最大の相違点が、その祖形を平城Ⅰ式あるいはⅡ式のどちらかに求めるかであることは先に述べた。本稿では、縄文地に沈線を施すという手法の特性と、胴部文様の文様構成上の類似性から、平城上層式の祖形について考えてみたい。まず、磨消縄文を用いないという手法上の特性についてであるが。この点に注目した場合、当然ながら平城Ⅱ式との関連が指摘できる。仮に平城Ⅰ式→平城上層式とした場合、手法上の連続性は否定せざるえない。また、成立に関連したといわれる北白川上層3期の土器をはじめ、併行期とさる彦崎KⅡ式系土器や北久根山第二型式においても、磨消縄文が主体であることを考慮すれば、外来の要素として捉えることは困難である。他地域にみられない要素だけに同地域内での連続性を重視すべきではないだろうか。

次に、胴部文様について述べていくが、まず平城上層式の胴部文様を振り返ってみたい。もちろん、いくつものバリエーションが認められるが、その主体をなすものは、横走る平行沈線と斜行沈線を組み合わせることにより、三角形、逆三角形の文様を連続させ、その中に「S」字状の曲線文を施すタイプである。このタイプの系譜を辿るとすれば、平城Ⅱ式のなかに類例が認められる。そこでは胴部上端に横走る沈線、逆三角形に施された斜沈線、その中に配された蛇行状の曲線文、といった平城上層式に連続すると考えらる要素がすでに準備されている。

このように、手法上の特性と文様構成上の類似性を勘案すれば、平城Ⅱ式→平城上層式という変遷案の方が、よりスムーズといえる。

これまで述べてきたように、平城上層式の成立については、平城Ⅱ式がその祖形として存在した可能性が高いといえようが、その一方で、平城Ⅱ式の内在的な変化だけでは、理解しえない属性を多数有していることも事実である。またこの点について、北白川上層3期に代表される東方からの影響を認める見解が大勢を占めていることは、先にも述べた通りである。もちろん、筆者もこの見解を肯定したい。ただ、器種構成の項で述べたとおり、北白川上層式との関連ばかりを強調するのではなく、彦崎KⅡ式系、北久根山式との相互的な関係にも注目する必要がある。とはいうものの、成立期の様相が明確ではない現時点では、どの地域の土器がどのような影響を与えたかは不明確といわざるえない。平城上層式の成立についてこれまで若干述べてきたが、平城Ⅱ式を祖形として、外来の要素を強く受けつつ生成したという考えに至った。しかし、平城Ⅱ式を祖形とする根拠は示すことができたものの、成立に関わる周辺地域との関連については、現段階では十分に把握できず、今後の課題として残しておきたい。



挿図5 胴部文様変遷図

- 1 平城貝塚、木村 (1984)
2-3 平城貝塚、木村 (1995)

した平城上層式土器の大部分が、広瀬上層式に近接した時期のものであることは型式学的に判断できる。また、伴出した土器の主体が、後続する広瀬上層式・伊吹町式であることも、先に示した時間的位置付けを傍証するものであろう。

最後になりましたが、浅学の筆者に、本稿記載の機会を与您とご指導頂いた犬飼徹夫氏をはじめ、本稿を作成するにあたり適切な御指導・御教示いただいた下記の諸先生・諸氏に心からの感謝の意を申し上げます。(林 潤也)

今川秀樹 木村剛朗 幸泉満夫 橘昌信 坪根伸也 幸しのぶ (敬称略、五十音順)

(なお、本稿において、敬称を略させて頂いた非礼を深くお詫びいたします。)

(註)

①一般的に「片粕式土器」と言う名称が用いられているが、本稿では平城貝塚の報告書という性格を考慮し、片粕式と同様の内容を示す「平城上層式」という名称を用いた。なお、研究史に限ってはその場に依じて名称を使い分けた。

②岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県片粕遺跡調査報告書』高知県教育委員会

終焉について

平城上層式の終焉については、先学の研究成果によりその概要は把握されている。1970年代には「片粕式→広瀬上層式→伊吹町式」という変遷案が確立され、現在も継承されている。口縁部文様態の幅狭化、口縁部文様の簡略化、胴部文様の圧縮化、口唇部の貼付文の簡略化といった個別の属性の変化からも、広瀬上層式への変遷が明かな以上、終末期の様相もある程度導き出すことができよう。

今回の調査出土した平城上層式を総括的に見てみると、口縁部文様帯の幅狭化と文様の簡略化がなされたものが多く認められることがわかる。具体的には、当型式を代表する有文深鉢A-1類の衰退が注目される。器種構成の項目で述べたとおり、この器種は平城上層式では主体的に存続するものの、後続する広瀬上層式には基本的に認められない。これらを勘案すれば、今回の調査で出土

1975年

③木村剛朗「高知県片粕遺跡出土の土器」『考古学ジャーナル』NO.96

1974年

④岡本健児『高知県広瀬縄文遺跡の調査』高知県文化財調査報告書13集

1963年

岡本健児・広田典夫『高知県広瀬遺跡第二次調査概要』十和村教育委員会

1973年

⑤木村剛朗「いわゆる広瀬上層式土器について」『考古学ジャーナル』NO.102

1974年

⑥犬飼徹夫「愛媛県平城貝塚の再評価」『考古学ジャーナル』NO.129

1976年

⑦犬飼徹夫「平城上層式土器について」『古代文化』第30巻第4号

1978年

⑧渡辺誠『桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会

1975年

⑨熊本県北九根山遺跡を標識遺跡とし、その研究のより、第一型式と第二型式に細分されている。

前川威洋「九州後期縄文土器の諸問題」『九州縄文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会 1979年

⑩高橋信武「片粕系土器の細分に向けて」『赤れんが』増刊号 1981年

⑪山口信義「周防灘・響灘沿岸地域における北久根山併行期の土器」『研究紀要』第4号 北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室 1989年

⑫註⑦)の中の分類

⑬犬飼徹夫が1987年に『愛媛県史 原始・古代』の中で、平城第1類を平城Ⅰ式、平城第2類を平城Ⅱ式として設定した。以降この名称が一般的に用いられている。

⑭犬飼徹夫が1987年に『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』の中で設定した名称で、平城上層式と同様の内容を示している。

⑮犬飼徹夫「平城式からみた緑帯文土器」第5回中四国縄文研究会発表資料 1994年

⑯木村剛朗『四国西南沿岸部の先史文化』幡多埋文研 1995年

⑰犬飼徹夫のいう平城Ⅰ式には鐘崎式を含んでおらず、両者の間に平城Ⅰ式に対する認識の相違が認められる。

⑱註⑯に同じ

⑲北白川上層3期、彦崎K2式系土器(後述)、北久根山第二型式を示す。

⑳註⑥、註⑯に同じ

㉑註②、註③に同じ

㉒犬飼徹夫・十亀幸雄『岩谷遺跡』岩谷遺跡発掘調査団 1979年

㉓註⑯に同じ

㉔平城上層式以外の土器が主体を占めているものの、比較的まとまってA-3類が出土している。しかし、典型的な平城上層式(有文深鉢A-1.2類)はほとんど見られない。

㉕阿部芳郎『津島岡大遺跡4-第5次調査-』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994年

㉖以降、彦崎K2式系土器として呼称する。

㉗阿部芳郎「後期Ⅳ郡土器の典型的な検討」『津島岡大遺跡4-第5次調査-』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994年

橋本雄一「彦崎K2式に先行する土器郡について」『津島岡大遺跡4-第5次調査-』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994年

平井勝「縄文後期・四元式の提唱-彦崎K2式に先行する土器郡について-」『古代吉備』第15集 1993年

これらの研究によると、永井V→津島岡大→百間川沢田(四元)→彦崎貝塚の彦崎K2式という細分案

が示されている。

㉘平井勝ほか「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 1993年

㉙坂本嘉弘「佐知遺跡」『大分県文化財調査報告書』第81輯 1989年

㉚ここでいう瀬戸内とは、彦崎K2式系土器の主要な分布域を指すこととする。現状では岡山県を中心とした地域となる。

㉛W次状の貼付文が退化し、把手をほとんど持たなくなった深鉢の段階を指す。代表的な資料として柏田遺跡の1号住居出土土器などが挙げられる。

小池史哲『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第4集 福岡県教育委員会

1977年

㉜出原恵三『西文増井遺跡郡発掘調査報告書』春野町教育委員会

1990年

㉝註⑩に同じ

㉞註⑯に同じ

㉟四国側の遺跡分布については、註16)と(犬飼徹夫「狩猟・漁撈の生活と文化」『愛媛県史』原始・古代I 1987年)を引用した。したがって、筆者が確認していない遺跡も含まれている。一方、九州側の遺跡分布は「有文深鉢A-1.2類」の口縁部の出土した遺跡を筆者の知るかぎり記載した。九州側でも胴部片のみしか出土していない遺跡も記載した場合、数遺跡増える見通しである。しかし、胴部片のみでは型式認定に不安があったため、ここでは記載できなかった。

㊱出原恵三ほか『田村遺跡郡』第1分冊 高知県教育委員会 1986年

㊲讃岐和夫・坪根伸也『下郡遺跡』大分市教育委員会 1990年

㊳坂本嘉弘「夏足原遺跡の調査」『大野原の先史遺跡』大分県教育委員会 1984年

㊴渋谷忠章ほか『三反田遺跡発掘調査概要』直入町教育委員会1985年

㊵高橋信武・綿貫俊一「前田I遺跡の調査」『横枕B遺跡・前田遺跡』直入町教育委員会 1989年

㊶松本健朗「天岩戸岩陰遺跡」『菊池川流域文化財調査報告書』熊本県教育委員会 1978年

㊷註⑩に同じ

㊸片粕式→松ノ木式」という考え方は、坂本嘉弘によってすでに示されている。

坂本嘉弘「大野川流域における縄文後・晩期土器の編年」『大野原の先史遺跡』大分県教育委員会 1984年

㊹橘昌信『黒崎貝塚発掘調査報告書』黒崎貝塚調査委員会 1981年

㊺山口信義『菊水町遺跡(1区の調査)』北九州市教育委員事業団埋蔵文化財調査室 1988年

㊻小池史哲『椎田バイパス関係埋蔵文化財報告-7-』福岡県教育委員会 1992年

㊼註⑩に同じ

㊽犬飼徹夫「狩猟・漁撈の生活と文化」『愛媛県史』原始・古代I 1987年

㊾犬飼徹夫は、この度の論考のなかで平城式土器に関する新たな見解を示した。筆者には十分に検討する時間がなかったため、本稿では取り上げるができなかった。御容赦頂きたい。

㊿この論争以前は、「平城I式→平城II式→平城上層式」が一般的な認識であった。

木村剛朗『四万十川流域縄文文化研究』幡多埋文研 1987年

㊿筆者は平城II式から平城上層式への変遷を支持したが、それをもって平城I式と平城II式の時間的・系統的關係を示唆するつもりはない。

第3章 第5次発掘調査の成果と将来への課題

第5次発掘調査は、東北約60m、南北約90mと予察されるほぼ楕円形状の貝層散布地の西南部、235㎡を対象としたものである。貝塚上に家屋密集という条件を持つ平城貝塚の持つ性格の把握に迫るには、それぞれの発掘調査の成果のみを単独に語ることで終わることは決して許されない。過去の調査の成果と照合し、かつ集成することが極めて大切である。恐らく、将来、数次にわたるであろう発掘調査においても、この姿勢をとるべきであることに多論を要すまい。そのような方途と経過をとらぬ限り、平城貝塚の全体像に迫ることは不可能である。本調査もその一環として扱えられるべきである。

平城貝塚の持つ集落遺跡としての性格の把握は、なお慎重であらねばならぬものの、若干、見えてきたように思える。まず、発掘面積140㎡となる第1・2次調査で13体の縄文人人骨が収納され、この発掘区（A・B・C・D）を墓地区と想定することが可能となる。第3次調査では人骨は全く収納されず、骨針（3個）、磨製鹿骨（4個）などの作業具の検出がみられた。また第4次調査では、前途の墓地区に接近した発掘区の北部分から人骨3体が収納されたものの、その南部分からは作業場的な住居跡とヤスと刺突具とみられる骨角器が検出され、魚獲物を対象とする工作跡的な遺構区と想定された。現在までに発掘対象区とされた貝塚頂部は、墓地区、それをとり囲むように作業区がプランされていたと考えることが可能となる。さらこれらとやや離れた外周部分となる今回の発掘区では、貝層中に貝笛、貝刃、貝輪が出土したB4グリットを中心に、祭祀的遺構としての性格が強いものとし得る。これは出土土器の時期差の問題があるものの、本貝塚の遺跡としての性格を考える上で、重要な視点を提供していると考えられる。（『報告書本文編1996』のP6、P7を参照されたい。）

貝層中からの自然遺物の検出については、今回の調査は画期的な成果を挙げることができた。貝塚を形成する貝そのものの同定については、その種類の数を飛躍的に増したし、なかんずく採集された微小貝の考察を通して、その生息環境がいずれも灌木林の落葉下であることから、本貝塚の古環境が、海に向った灌木林中に形成されていたとの指摘（渡辺誠教授）は貴重であろう。

遺物の収納の上からみた場合、すでに集積されている第4次調査までの遺物に加えて、更なる遺物を加えるところとなった。貝製品においては、貝輪を追加し得たし、新たに貝笛、貝刃、貝製容器の資料を検出した。また糞石の検出とその考察は、四国島では類例が少ないだけに貴重である。

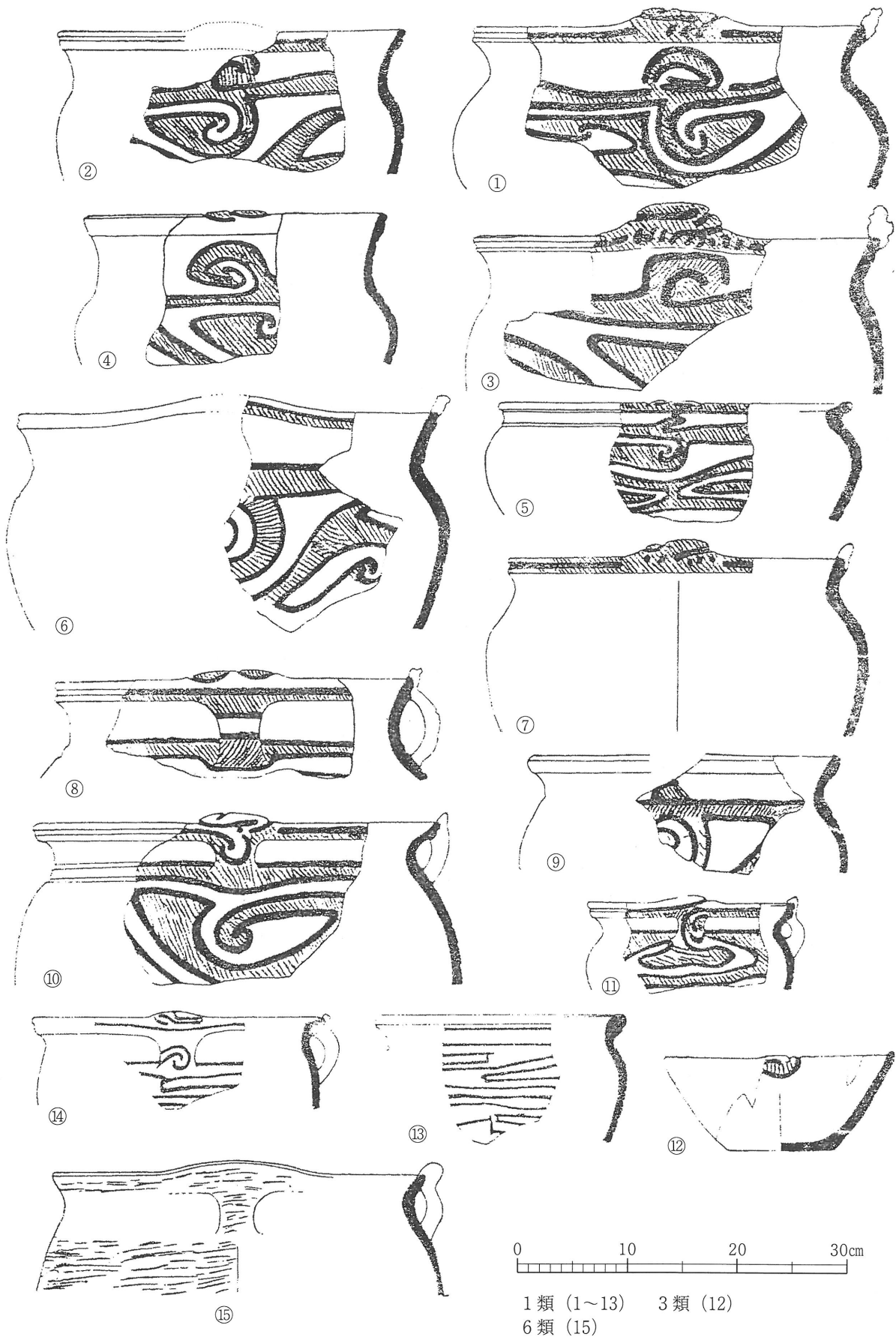
第5次調査で検出した土器類は、縄文後期後半期のものを主体とする土器であったが、本貝塚の形成時期の下限を上げた意味をもつものとされる。また、少量ながら他地域との交流を示す搬入土器の検出は、本遺跡の性格を考える上で重要視されるべきものである。

石器原材については、大分県姫島産黒曜石の存在は、従来からの知見を更に強固にするものといえる。その一方で、遺跡の近くを流れる僧都川から豊富に獲得される頁岩に拠るものを主体にしている実相も明らかにし得た。

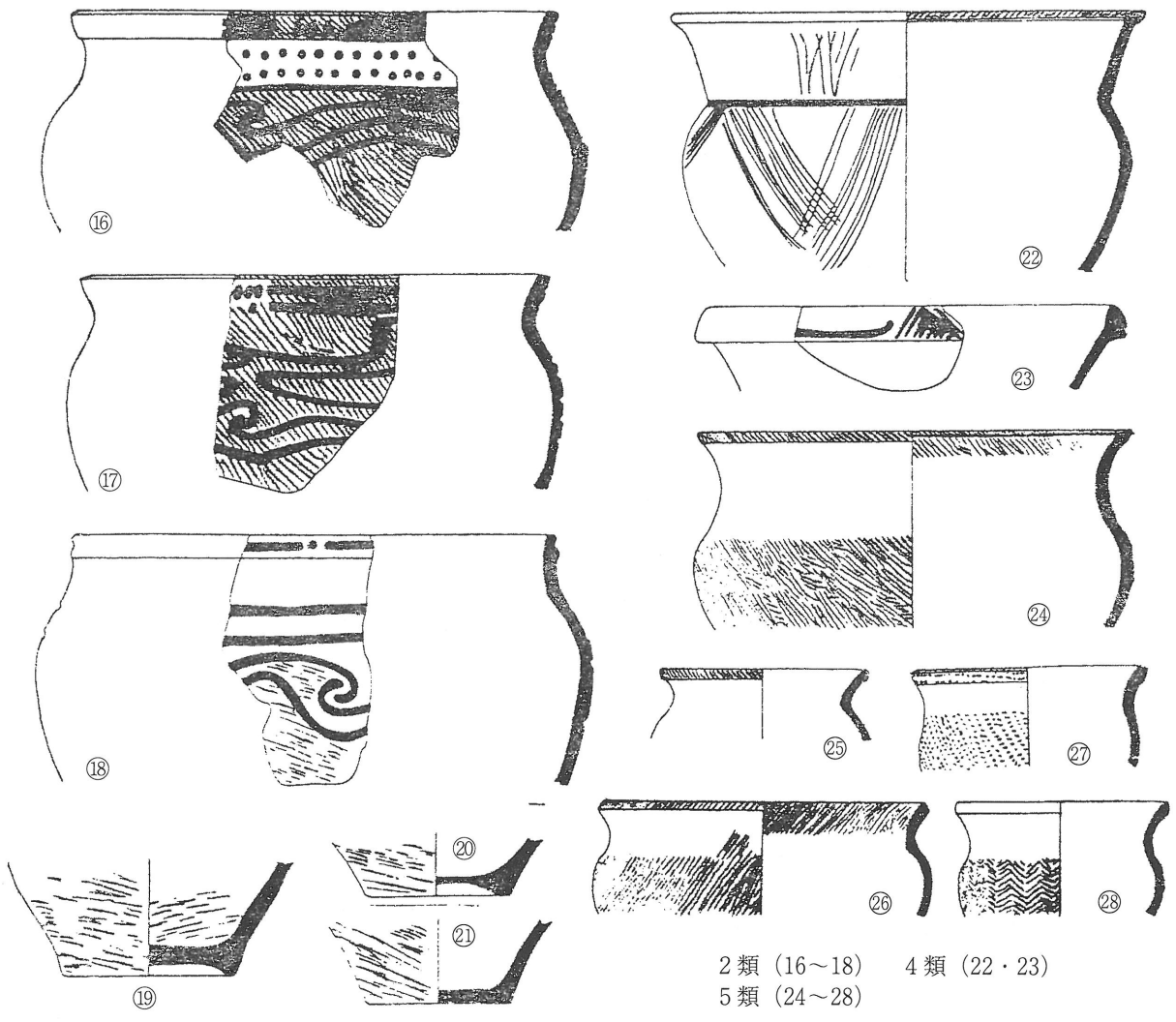
いずれにせよ、冒頭に述べた如く第5次調査での成果は、これから数次にわたって実施されるであろう平城貝塚調査への一環を形成するに過ぎない。しかしそれは、将来の調査への貴重な架け橋になることを自負したいと思う。

一方、保存展示の現状としては充分とは言いがたく、平城貝塚発掘資料が、地域の活性化につながり、かつ研究者にとって有効に活用できる設備と内容を持つ方途がとられることも今後の重要な課題である。(犬飼徹夫)

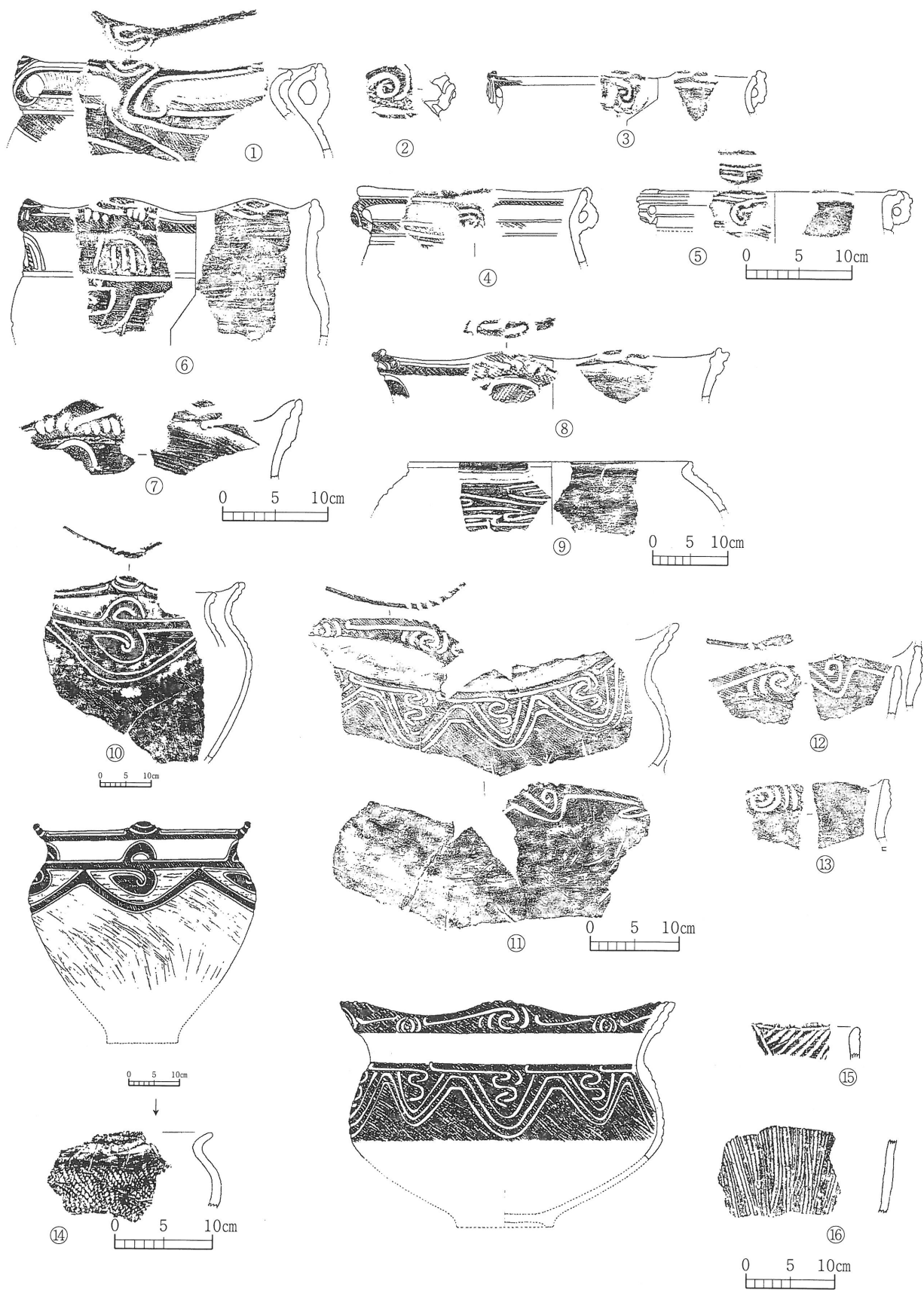
図 版



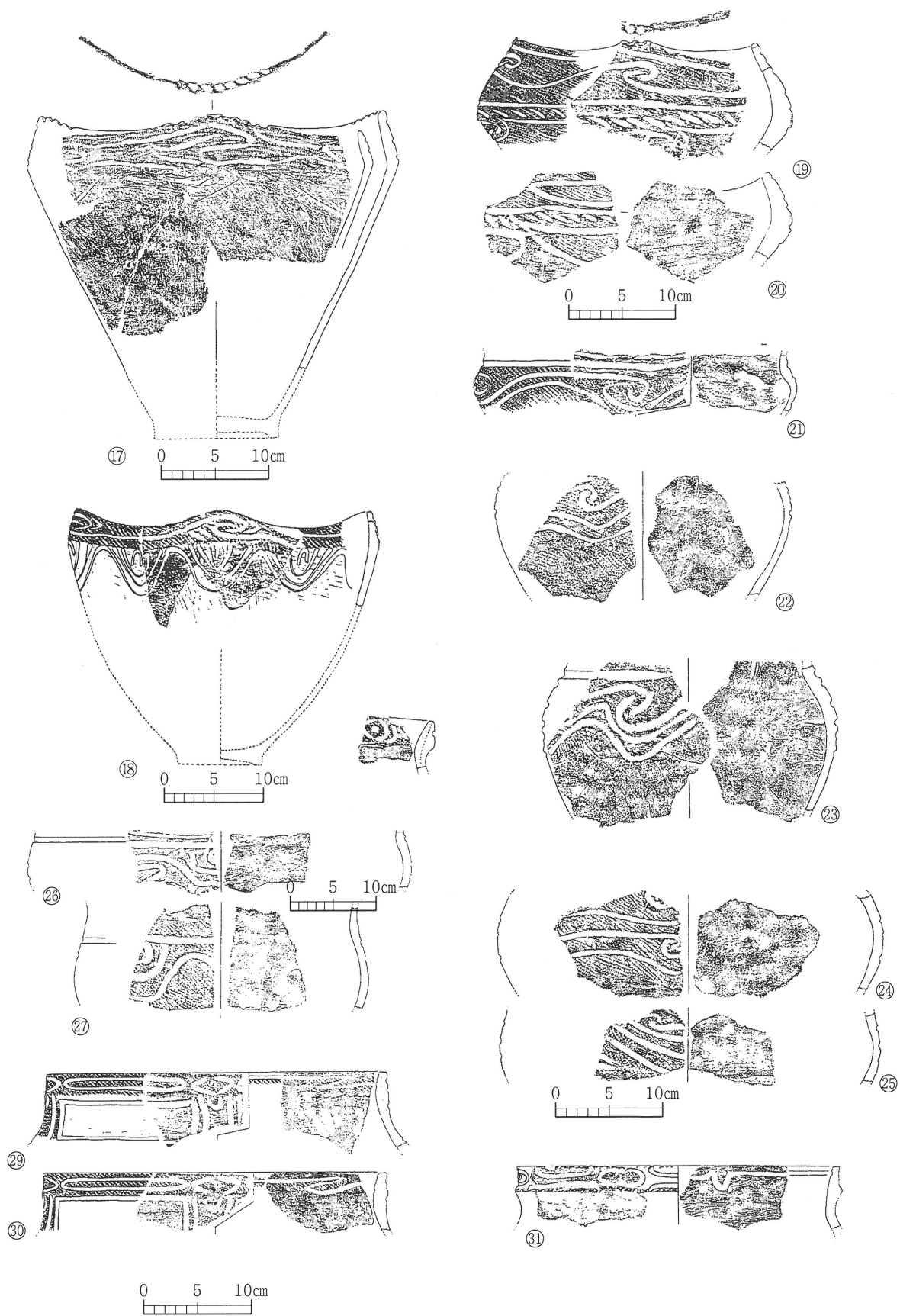
挿図6 第1次調査出土土器図(1)



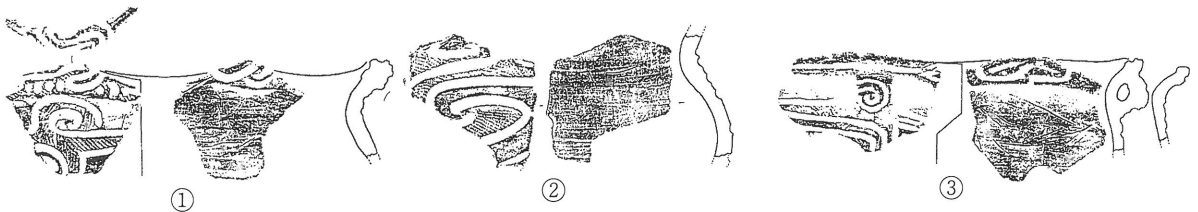
挿図7 第1次調査出土土器図(2) 29-33は写真図版からの拓図



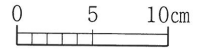
挿図8 第3次調査出土土器図(1)復元図



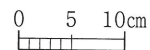
挿図9 第3次調査出土土器(2)復元図

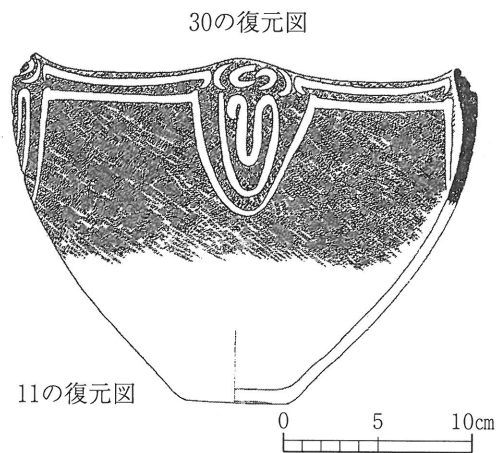
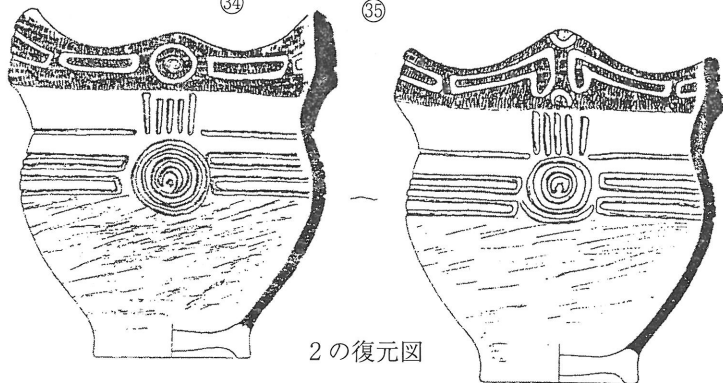
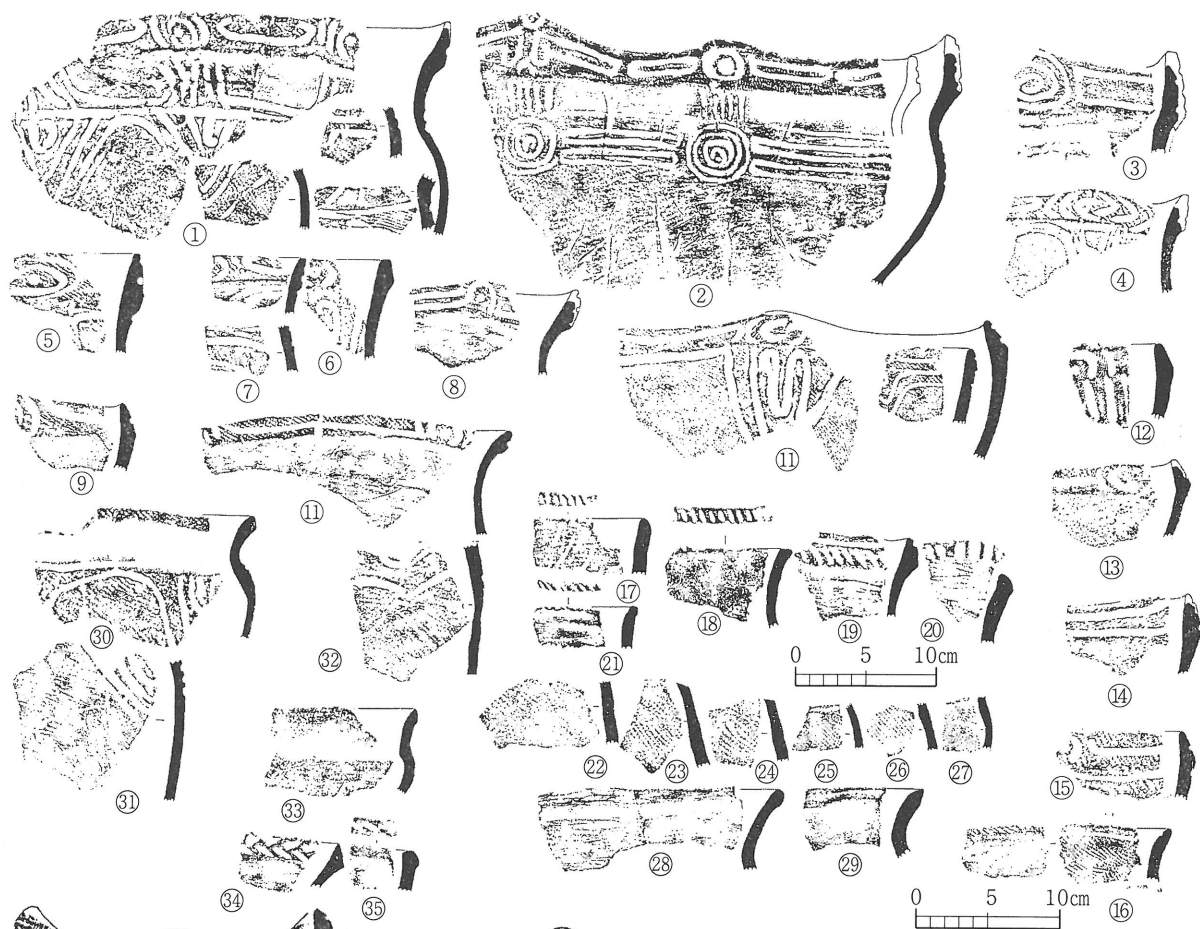


挿図10 第2次調査出土土器 (1~3)

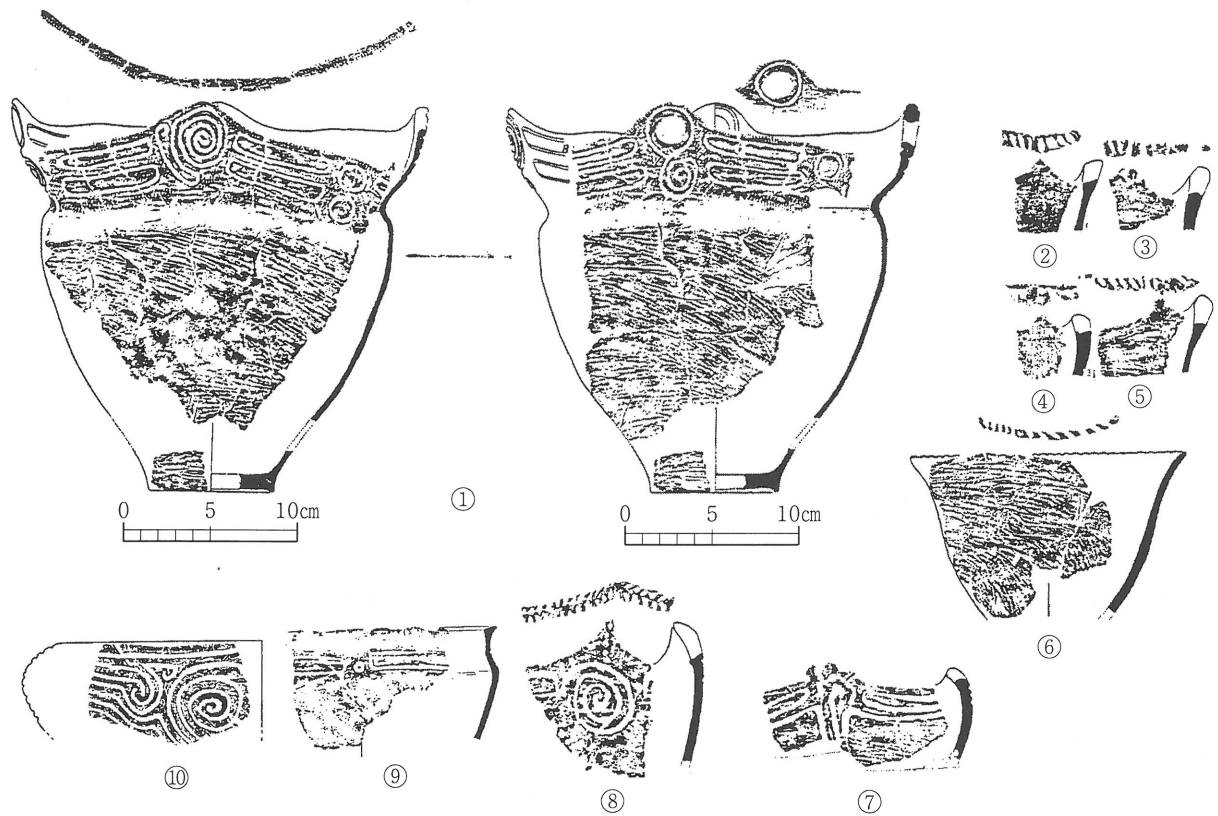


挿図11 平城上層式土器 (1978) 報告拓図

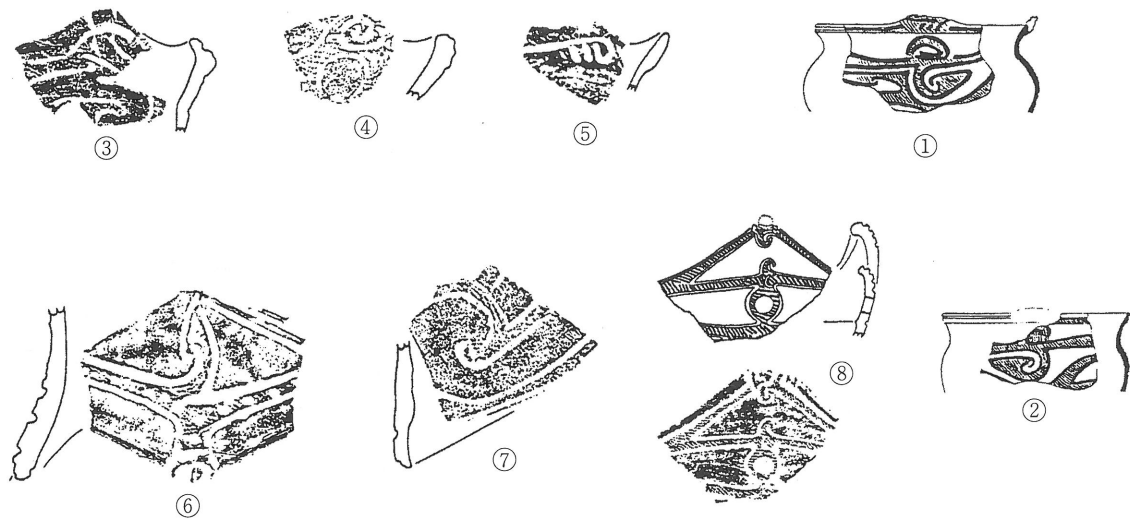




挿図12 第4次調査出土土器復元図



挿図13 三里式土器1~9 三里遺跡10 松ノ木遺跡
 (1~9 岡本・木村 1978 10 前田・出原1992)



1.2 平城I式土器(平城貝塚出土) 3~8 宿毛式土器(宿毛貝塚出土)
 3~5 口縁部へ繋がる要因、6~8 II文様帯へ繋がる要因
 (1.2 西田・鎌木 1957 3~8 前田 1994)

挿図14 宿毛式土器と平城I式土器との系譜要因図

平 城 貝 塚

平城貝塚第V次発掘調査報告書Ⅱ

1997年3月31日発行

編 集 御 荘 町 教 育 委 員 会
発 行 御 荘 町 教 育 委 員 会
愛媛県南宇和郡御荘町平城3063番地1
TEL (0895) 73-1111 (代)
印 刷 佐川印刷株式会社

